GOD EATER～鎧ヲ纏ウモノ～

striker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ～鎧ヲ纏ウモノ～

【Ｎコード】
Ｎ３８５３Ｏ

【作者名】
ｓｔｒｉｋｅｒ

【あらすじ】
俺はあの時、死ぬ覚悟が出来てはいた、だが死ぬつもりはなかった。だが最後の最後で力尽きて倒れた時は諦めがついた・・・・・だって言うのに、何だこいつらは？

第一話（前書き）

はじめまして、新型ゴッドイーターの主人公ではありませんので、
その点にご注意ください。
あと幾つかオリジナルの設定・武器などが出る可能性あり
ゲームとコミックの設定がごっちゃ等に注意してください

第一話

～西暦２０６９年～

？「ったく！、何体いやがるんだこいつ等は！？」

この状況に文句を言いつつも攻撃は止めない。神機から発射された冷気を帯びたレーザーは奴等・・・『アラガミ』を撃ち貫く。

簡単なミッションの筈だった、贖罪の街に出没したコンゴウ一体の討伐、新人を実戦慣れさせるには調度良い相手だと思って同じ部隊のソーマを連れてミッションに出た。さっきまでは楽勝、新人のエリックももうそこまで労せず倒せる位には慣れていた。・・・しかしアナグラに戻る途中で、出没情報の無いアラガミ、「ヴァジュラ」が大挙して現れやがった。

とにかく一旦アナグラに戻ろうにもこいつ等、撤退しようとする俺達を邪魔するように動きやがる。エリックにはきついだろうがこいつ等を全滅させるしかないと言う結論に至り、こうして交戦している訳だ、が！

？「いい加減全滅しても良いんじゃないのか！？」

ソーマ「文句を言う暇があるなら援護しろ！」

？「分かってるつーの！。エリック！まだくたばってないだろうな

！？」

エリック「正直言ってきついですけど、何とか生きてますよ！」

ソーマに叱られつつその近くにいるエリックに確認をとる。どうやらまだ大丈夫らしいが、果たして後どれくらい持つことやら。なんてこと言ってたらまた来やがった！、迫ってきたヴァジュラにバレットを撃ち込んで二人のところに移動し背中合わせ状態になる

？「おいお前ら。スタングレネード、まだ残ってるか？」

三人で背中合わせの状態で二人に尋ねる

エリック「僕はあと一つしかありません」

ソーマ「俺はあと二つだ、どうする気だ？」

？「こっちはあと四つ。いいか？合図したら全員同時に投げる、そんで怯んだ隙に速攻でアナグラに撤退するってだけの作戦とも言えない案だが、確実ではある。連中は大体捲けるだろうし、ダメだったら残ったグレネードで怯ませる。単純な案だが、乗るか？」

提案して二人に確認する

エリック「どう考えてもこれ以上は不利です、僕は乗りますよ」

ソーマ「俺もそれでいい、さっさとしろ」

？「よし、３・２・１で同時に投げろ、失敗しても文句言うなよ」

そう言ってる間にもヴァジュラ共が少しづつ近づいてくる

ソーマ「3・・・」

完全に囲んで周りを回りながら様子を窺うようにしている。

エリック「2・・・！」

下手をすれば直に跳びかかって来そうだ、タイミングまであと少し・・・！

？「1・・・！」

そして・・・とうとう跳びかかって来た！！

？「今だぁ！！」

その言葉と同時に俺たちは三人同時にスタングレネードを投げた。一つだけでも複数のアラガミを怯ませることが出来るんだ、三つ同時なら相当効くだろ！

？「よし！、今のうちにアナグラまで撤収するぞ！！」

エリック「言われなくとも！」

ソーマ「早くしろ！」

？「って、お前ら早っ！、置いてくなー！」

ともあれとっとと撤収しねーと、連中が何時こっちに来るか分から

ん、急いで行かねーと。・・・

―――

そうして走っていると、とりあえず追って来てないようだ、今の内にアナグラに・・・っ！？

？「うおっと！？」

後ろを見た瞬間光弾が飛んできた、咄嗟に回避出来たから良かったものの、当たったら洒落にならん。一体何が・・・！？

エリック「カオルさん！？」

ソーマ「カオル！」

二人が呼んでるが・・・・一寸これは無いんじゃないか？、何で因りによって

エリック「第一種接触禁忌・・・！？」

そう、今俺の目の前にいるのは、数多くゴッドイーターを葬りその神機を喰らってきたゴッドイーターの天敵とも言える存在。

第一種接触禁忌アラガミ『スサノオ』

何で因りにもよってこんな時に！

エリック「ここが年貢の納め時、ですか？」

ソーマ「ああ、まだヴァジュラの群れを完全に捲いた訳でもない」

カオル「くそっ・・・！いや、助かる可能性はまだある」

エリック「えっ？」

ソーマ「なに？・・・」

二人が驚いた顔をしてこちらを見ている。混乱してる間に実行する

カオル「助かる可能性はある、ただし・・・

お前ら二人だけなっ！！」

そう言って神機をフルスイングして二人を吹っ飛ばした直後、先ほど避けた光弾が当たったビルが倒壊した。これで完全に行き止まりだ

カオル「俺はこいつを足止めしてから行く！、お前らは先にアナグラに戻れ！」

倒壊したビルの向こうに居るであろうソーマとエリックにそう告げる

エリック「カオルさん!?、馬鹿な事言ってないで貴方も早く撤収してください!!」

エリック、そうは言うがな・・・

カオル「悪いが、こいつは足止めしねーとヴァジュラ達みたいには行かないみたいだぜ」

目の前のスサノオは両腕から光弾を何時でも放てる状態、こちらを逃がすつもりは更々無いみたいだな

エリック「でもヴァジュラが何時また現れるかも分らない状況で、スサノオと一対一でやり合うなんて、無謀すぎます!」

カオル「そのヴァジュラ共が何時来るか分らないからとっとと戻れっつってんだよ!。ソーマ!その馬鹿引きずってでもアナグラに戻っぐあっ!?!?」

ったく、人が話してる時に撃ってきやがって・・・!

カオル「聞こえてんのか!、さっさとアナグラに戻れ!!」

ソーマ「・・・くそ!エリック!、戻るぞ・・・!」

エリック「ソーマさん!?なぜですか!?」

足音がどんどん遠ざかって行った・・・如何やらアナグラに戻って行ったようだな・・・・・さてと

カオル「待たせたなサソリ野郎、さっきはよくもやってくれやがったなおい？」

神機のレールガンに似た銃身パーツ『ドラグノフ』の銃口をスサノオに向けながら話しかけるが。神機のコアが妙な明滅を繰り返してる。第一種接触禁忌の理由にそのアラガミが発するパルスが神機を不安定にさせる、なんて聞いたが俺の神機はそんなんじゃ無い。腕輪を通して解る、こいつは

カオル「ビビってんのか相棒？、ビビる暇があるなら生き残るためにオラクルをガンガン生成してくれっての」

そう自分の神機のコアに話しかける。他の神機使いから見たら変な光景だろうがな、一応意思が有るみたいだからこうして話しかけてるわけだ。というか、声を掛けてからコアの明滅は治まり、オラクル細胞の回復速度が上がったのを確認する

カオル「さて、覚悟は出来てるかサソリ野郎？どっちが狩られる側か教えてやるから掛ってきやがれ」

そういった直後にまた神機のような両腕から光弾を撃ってきやがるからサラリとかわし、その両腕にバレットを一発づつ撃ち込んだ直後、スサノオの両腕を内側から食い破るようにレーザーが飛び出して行った。

『内臓破壊弾（ないぞうはかいだん）』

何処の誰が作ったのかは不明、気付いたらエディット方法がアナグラのデータベースに載っていた強力無比なバレットの一つ。

カオル「さて、覚悟はいいか？ゴッドイーターキラー」

楽しくなってきやがった・・・・・・！

その後、アナグラに戻ったソーマとエリックは今回の一件を報告、大量のヴァジュラとスサノオの討伐及びカオルの救援のために第一

部隊全員と第二部隊も数名出動するが、あれだけ大量にいた筈のヴァジュラは残り3体ほど、その周辺には多数のヴァジュラの屍とそしてスサノオの屍が一体あった。討伐と素材の採取終了後にカオルの捜索が引き続き行われたが、発見できたのは多少傷ついた『ドラグノフ』と神機のパーツの一部のみであり、カオルとカオルの神機の本体は発見する事が出来なかった。

九条カオル（17）・2069年・ミッション『はぐれ猿』改め『蒼穹の捕食者』にて―MIA（戦闘中行方不明）。最終階級・狙撃曹長

第一話（後書き）

では、また次回

第二話（前書き）

ゴッドイーターのキャラはほとんど出ない上に
どっかべつのゲームのキャラを引っ張って来てオリジナル設定を付けました

そういうのが苦手な方は注意してください

第二話

～西暦２０６９年～

カオル「・・・・・・何処だ、ここ？」

おかしい、俺はあの時ヴァジュラが何体か残ってる中で力尽き倒れたはず、スサノオを倒してすぐににヴァジュラ共が追いついてきて、そいつ等を倒しながら別のルートを探している途中で、連中の雷球をまともに喰らい倒れた。なのになんで生きてて治療された後まである？。

というか、ここはどう見てもアナグラには見えない。言ってみればどっかの家の一室。だがアラガミに喰われた形跡等何処にも無いのはおかしい、どう言う事だ？

カオル「兎に角、この家の住人に会う必要があるな」

神機は一応ベッドの近くに置いてあったが・・・酷い姿になっちまって。

『ドラグノフ』は丸々無くなり、他のパーツも一部が砕けて酷い事になっている。唯一無事なのは持ち手の部分とコア『アーティフィシャルＣＮＳ』、そして自分の腕に取り付けられた腕輪『Ｐ５３アームドインプラント』位の物だ。と、そこでドアの開く音が

？「・・・おや？、漸く目が覚めたようだね」

ドアを開けて入ってきたのは老人だった、一体何者？

カオル「ああ、お陰様で。ところでここは何処だ？、それにアンタは？先に名乗るが俺は九条カオル。フェンリル極東支部所属の狙撃兵曹長だ」

？「ああ、名乗らずにすまない。私の名はシキ、知り合いからはドクターシキと呼ばれている、そして此処は、君たちが愚者の空母と呼ぶ場所の近くにある私の研究所兼家だ」

いや贖罪の街から愚者の空母ってどんだけ距離あんだよ

カオル「じゃあどうやって俺を運んだ？。老人にしては体ががっしりしてるが、流石に一人で俺と、パーツが無いとは言え神機を運ぶなんて出来ないだろう？」

シキ「私の友人に手伝って貰ったのだよ。四人居たので、君一人と荷物を運ぶぐらいは問題ないと思ってね」

なるほど？・・・じゃあ、これが一番の疑問なんだが・・・

カオル「アンタとアンタの友人は、どうやってアラガミが居る中で俺を運んだ？」

そう、それが一番の謎だ。この爺さんの友人は見て無いから何とも言えないが、この爺さん自身に戦う術は無い様にしか見えない。当り前だろうが神機使いでも無い、腕輪が無いしな。そんな中で数体

のヴァジュラを如何にかして運んで来るのは無理だ。それに愚者の空母の近くということは外部居住区の外、『対アラガミ装甲壁』が無いということだ。そんな所に居て如何して無事でいられる？

シキ「・・・・・連れて来た以上、言うしか無いか・・・私も、私の友人もフェンリル本部所属でね。此処で独自に神機の研究開発をしているのだよ」

なに？

カオル「何でまた極東で。それに神機の研究開発って・・・」

シキ「『新型神機』の話は聞いた事があるかね？」

新型？そういえばリッカから聞いた事があるな。新型の可変式神機が開発されてるって

カオル「ああ、一応な」

シキ「私もそれの開発に関っていたのだが、その新型とは別に、今迄の物と全く異なる神機を開発している」

今迄の物と全く異なる？神機と言えば最古式のピストル型、ショートブレード・ロングブレード・バスターブレード等の近接式、スナイパー・アサルト・ブラスト等の遠距離式、そんでリッカから聞いた新型可変式。これ等と全く異なる神機っていうと・・・？

シキ「そこで、君に頼みたい事があるのだが、聞いてくれるかね？」

カオル「俺に？」

シキ「そう・・・・・・頼む、君の神機のコアを、たった今完成した神機に移植させてくれないか？」

カオル「なんだと？」

コアを移植？そんなことできるのか？。いやそれ以前に・・・

カオル「コアを移植したら、俺の神機はどうなる？その返答次第じゃあ断らせて貰う」

こんなボロボロになってはいるが、それでも長い間一緒に戦ってきた相棒だ、手放すつもりはこれっぽっちも無いんでね

シキ「コアを移植した神機を君にテストついでに使って貰いたい。神機に適合するという事は、その神機のコアと適合するという事だからね、そのコアを移植した時点で、適合者は君になる、という事だ」

は～、よかった・・・だが、使うにしてもその神機次第だな

カオル「分かった、アンタの頼みを聞いてやる、だがその前に、その完成した神機とやらを見せてくれ。使うにしても移植する前にどんな物かを見たい」

シキ「良いだろう、私とて、腕の立つのゴッドイーターを失うつもりは無いのでね、移植する前に神機を見せよう。立てるかね？」

カオル「立てるかだ？ゴッドイーター嘗めんな、ヴァジュラの雷球を受けた程度で動きに支障が出るようじゃやってられねーよ」

そう言ってベッドから出て、両の足で確りと立ってみせる

シキ「流石だな、遠距離式であの数のヴァジュラとスサノオを倒すだけの事はある、では、ついて来てくれたまえ」

カオル「分かった」

そう答えて爺さんの後をついて行く、部屋から出て見た感じは何処かの家の様にしか見えないがな。と、爺さんが立ち止まって何かを操作していると・・・壁が開いた

シキ「研究所は地下にあってね、そこに完成した神機も安置してある」

成程、上ではなく地下に伸ばしてる訳か、アナグラみたいに。そうしてまた爺さんについて行き地下に降りる。地下に降りると、そこは如何にもアニメ等で見た秘密基地じみた作りになっている。・・・何だこれ

カオル「おい爺さん、何だここ・・・？」

シキ「言わないでくれ、こんな作りにしたのは私の友人だ・・・」

どんな友人だよ・・・、とにかく爺さんについて行っていると爺さんがが止まった、如何やら此処らしい扉の上には

『神機開発研究ルーム』

と書かれていた、此処だな

シキ「中に私の友人たちがいる筈だ、神機を見せるついでに紹介しよう」

そう言って扉を開けた、扉の向こうに居たのは

薄い水色の髪をした長身の青年

赤いロングヘアーを背中まで伸ばしたプロポーションの良い女性

紺色の短い髪をした筋骨隆々の男性

薄いピンク色の髪をした小柄な少女

なんだこのメンツ？こいつらが爺さんの友人か？

シキ「君たち、拾ってきた彼が目を覚ました。自己紹介をしてくれたまえ」

そう中の連中に言った爺さん、中の連中もこっちを見て了承の意を告げる

青年「初めまして、僕はウィンター。ウィンター・シーズン。よろしく」

女性「私はオータム・シーズン、よろしくお願いします」

男性「俺はサマー・シーズン、よろしく頼む」

少女「わたしはスプリングっていうの、よろしくね～。ちなみにわ

たし達血が繋がった兄弟だからその辺もね」

そう其々に挨拶してきた彼等『シーズン四兄妹』。にしても似てないなオイ。唯一共通しているのはみんな胸元にΛのマークがあることと、腕輪をしていること。こいつらみんな神機使いか

カオル「よろしく。俺は九条カオル、ところで、この爺さんに神機のコアを移植させてくれと頼まれたんだが」

サマー「なに？」

オータム「本当ですかドクター？」

驚いた様子で爺さんに問い掛ける四人

シキ「本当だ、そして彼も了承してくれた。移植する前に、彼に完成した神機を見せておきたいのだが、問題無いかね？」

四人の問いに答えてそう聞く爺さん改めドクターシキ、その顔は研究者のそれである。マッドサイエンティストとかではなく、良識ある研究者の

ウィンター「ええ、調整は完璧に出来ています。あとはコアさえあれば直ぐにでもテストを始められます」

スプリング「武器の方も調整完了したよ」

ウィンターとスプリングがシキに調整は完了したと答える。ホントにコアだけが無い状態の様だ

シキ「そうか、では神機を此処へ」

オータム「はい」

オータムがそう答えパネルを操作すると、近くにあったゲートが開いた。白い煙でよく見ないが、それも段々晴れてきた。そして中にあったのは・・・

カオル「なんだ、これ・・・？」

中にあったのは、全体的に白い装甲、一部に青と赤が少数のカラーリング。人の形をしていて、胸部には緑色の半透明な何か、肩には後ろに向かって伸びるアンテナが左右両方にある、腰に当たる部分の後ろには左右に向かって伸びる柄の様なパーツ。顔に当たる部分は二つの眼があり、額には短いVの字型のアンテナ、両耳に当たる部分には、後ろ斜め上に向かって伸びるアンテナがある。背中には三つの噴射口のような物があり、真ん中に調度、神機のコアと同じサイズの窪みがある。

ロボットのような何かが、そこにあった

カオル「装甲服・・・？」

シキ「似ているだろうが違う。これは装着者の身体能力を飛躍的に向上させる、所謂パワードスーツだ」

カオル「パワードスーツ？」

シキ「そう、神機使いの防護に重点を置き開発した神機」

ウィンター「それがこの『パワードスーツ型神機』だよ」
そう誇らしげに言うシキとウィンター。なるほどな、神機使いは高い身体能力を生かすために殆どが軽装、若しくは私服だ。
スプリング「気に入って貰えた？」
スプリングが俺にそう尋ねる
カオル「ああ、面白そうだ。相棒も文句は無いみたいだしな」
神機のコアが腕輪を通して伝えてくる
カオル「じゃあコアの移植とやら、とっとと始めてくれ」
シキ「分かった、だがこれの為の装備はまだ完成したとは言えないのだ、これに慣れるための訓練と並行して装備の開発も手伝ってほしいのだが・・・最低でも2年程つき合って貰いたい」
カオル「長っ・・・・・・まあ問題ないだろ。ところで、フェンリルでは俺はどういう扱いなんだ？、何日か経ってるんだろ？」
サマー「フェンリル本部にはお前の生存を伝えてあるが、極東支部ではお前はＭＩＡ、戦闘中行方不明という扱いだ」
カオル「ＭＩＡ？あの状況じゃ殆どＫＩＡ（戦死）も同然だろ」
スプリング「まあまあ、とりあえず、さっさと終わらせましょ？」
そうだな、とっとと終わらせてこいつに慣れたい・・・あ、そうい

えば

カオル「気になったんだが、この神機に名前はあるのか？」

スプリング「あ、そういえば言ってなかったわね」

シキ「うむ、君が使うのに名前がなければ不便だろうし教えておこう・・・・・八百万の神が敵に回ったようなこの時代で、この様な名を付けるのも如何かと思うが・・・」

スプリング「私が言う？」

シキ「いや・・・・・この神機の名は、女神『アストレア』。唯一人と共に闘う神として名付けた」

アストレア・・・正義の女神だったか？

カオル「このご時世でそんな名前を付けるとはな・・・でも、面白そうじゃねえか」

そして俺は神機・・・アストレアを見ながら言う

カオル「ま、これからよろしくな、女神様？」

さてと、これからどうなる事やらな？

第二話（後書き）

お目汚し失礼

キーワードにガンダムＯＯＰを付けてた理由です

見た目殆どガンダムアストレアです

ちなみに関節は神機の黒い生体部分です

装甲表面は神機の装甲パーツと同じような方法で守られています

では、また次回

第三話（前書き）

戦闘描写ってホントに難しいです

時間が一気にゲーム本編の時間軸に進みます、すみません

２年間の間の話は、機会があれば外伝にでも

第三話

～時は進みまくって西暦２０７１年～

シキ「では今回は、今まで開発した武器を可能な限り装備してテストを行う。カオル君、準備は良いかね？」

カオル「問題ない。アストレアにも異常なし、武器へのオラクル供給準備も完了した」

シキ「そうか、では武器を可能な限り大量に装備してくれ。今回で訓練も終わる、頑張ってくれ」

カオル「了解」

さて、とうとう2年経っちまったな・・・ドクターが言うには、今回の重装備の訓練ですべて終了、俺もアナグラに戻る事が出来るそうだ。さて装備はっと・・・

～装備中～

よし！、これだけ付ければ充分だろ。基本装備の腰のレーザーブレード（ショート相当）に、追加装備は右腕に折り畳み式のブレード（ロング相当）にハンドミサイルを取り付け右肩に大型ランチャー（スナイパー相当）、左腕にシールド（シールド相当）を取り付け右手に伸縮式のバズーカ（ブラスト相当）を持ち右腰にライフル（アサルト相当）、左腰にモーニングスター型のハンマーを取り付け、両足にはハンドガン（強化版ピストル型）を左右に一丁ずつ装備した。これだけ積めば充分だろ。

カオル「ドクター、言われたとおり可能な限り装備したが？」

シキ「うむ、では実戦で試すため、愚者の空母に出没した『ボルグ・カムラン』を討伐してくれ」

カオル「カムラン？そいつとぶっつけ本番かよ」

シキ「念のためスプリングとサマーを同行させる、既に二人とも待っている・・・だが君一人でも問題は無かろう？」

カオル「ドクター、何事にも絶対なんてモノは無いんだよ。じゃあ、空母に行っとくからな」

そう言って地下訓練場の扉から外へ向かう・・・・・しかし自分で着けといて何だが少し動きづらいなこれ、特に右肩のランチャーが。取り付けて砲身を下に下げただけだし

そんな事を考えてたら外に出た。さっきまで通っていた地下通路は其処ら中に繋がっていて、俺が今出たのは愚者の空母へ繋がる橋の近くだ、ドクターが言ったとおりサマーとスプリングが居る

カオル「よぉ、お前ら、待たせて済まん」

スプリング「あ、やっと来・・・うわぁ、また大量に持ってきたわね」

サマー「そんな量の武器を一度に使うのは難しいぞ？」

カオル「さあ？多分問題ないだろ、相棒が火器管制をサポートしてくれるしな」

相棒・・・つまり神機のコアだが、移植した後に暫くして戦闘をサポートしてくるようになった。まぁこっちとしては大助かりだがな

カオル「さ、お喋りはこれ位にして、さっさとテストを終わらせようぜ」

スプリング「そうね、あんまり遅いとドクターが怒りそう」

サマー「今回俺たちはお前のサポート・・・と言うよりは、お前がやられた場合に喰われる前に回収するのが目的だがな」

カオル「心配すんな、俺がそう簡単にくたばるとでも？、それにこいつの防御力はお前らも知ってるだろ」

サマー「フッ、そうだな。だが念の為という事だ。行くぞ」

そう言ってサマーとスプリングも自分の神機を手に取った、二人の神機も少し変ったものだった。

サマーの神機は巨大なドリルを装備し、敵に合わせてそれをチェーンソーやハンマーに変形させる、あとスタングレネードの射出機構が付いている。

スプリングの神機は巨大な重火器だ、上から順番に多連装ミサイル・レーザーキャノン・大型ガトリング砲が並び、更にはそれが展開し大型レーザーを発射するという代物だ。

つまりサマーが切断・貫通・破砕を、スプリングがブラスト・スナイパー・アサルトを全て使いこなす事ができるということだ、凄まじいなオイ

そうこうしてる間に空母に着いた、カムランは・・・いた、のんびり飯食ってやがる

カオル「じゃ、行ってくるわ、お前らはここで待機な」

サマー「わかった」

スプリング「無理はしないで、危なくなったら信号弾を発射してね」

カオル「分かってるって」

二人にそう言ってカムランの近くに移動を開始する

～愚者の空母～

見つからないように足音は最小限出さないように、視界に入らないように障害物に隠れながら移動する。ある程度近づいたか

先制攻撃にランチャーとバズーカを同時に喰らわせる為に構え・・・・・・発射！

着弾と同時に爆音が響く

グアァァァァアアアアア！！！

攻撃を喰らわせたこっちに向かって来るつもりの様だが、まだまだ距離は空いてるんでな。接近してくるカムランに更にハンドミサイルと腰のライフルも構え、可能な限り叩き込む！！

カオル「そらそら！、まだまだオラクルは残ってんぞ！！」

一斉射撃とばかりの勢いで撃つが流石にカムランは堅い堅い。何度も怯み、盾はバズーカとランチャーで結合崩壊してるっつーのに向かって来やがるっと、そろそろオラクルが切れるな、修復が済むまではブレードで対応するか！

ランチャーを放し待機状態にし、右腕のブレードを展開、カムランの突撃をステップで回避し足に剣撃を入れる

斜め上から袈裟斬り、右薙ぎ、左薙ぎ、回転しながら右に薙ぎ払ったところでステップして離れ、そこにバズーカを撃ち込んだら足の一部が砕けた、結合崩壊

カオル「よっし！、次は尻尾だグオン！！？」

そう言ったところで横殴りに衝撃を受けて吹き飛ばされる、如何やらその尻尾の回転攻撃を食らったようで・・・野郎

カオル「やってくれんじゃねえか！！。相棒！ランチャー分離！」

この距離だとデッドウェイトになるランチャーを右肩から切り離し、背中のスリーブースターを使って一気に接近しブレードで斬りつける。

袈裟斬り、横薙ぎと斬っている途中でまた回転攻撃の態勢になっているカムラン

カオル「そう何度も食らうかっての！」

カムランが回転を始める寸前でブレードを真上に斬り上げ、その勢いで真上にジャンプする。カムランの回転が空振ったところで尻尾に向かってバズーカを撃ち込むと尻尾の一部が砕けた

カオル「こいつで仕舞いにしてやる！」

そういってスリーブースターでカムランの真上に飛び上がり、そこから背中に向かって撃てる武器は全て撃つ。ある程度撃ち込んだところでブレードの切先をカムランの頭に当たる部分に向け、急降下

を開始する！

カオル「チェェストォォォォォォ！！！」

カムランが腕を盾にしているがそれをブレードで粉砕し、カムランの脳天に振り下ろす！

カオル「はぁ～・・・あ、終了の合図を撃っておかねぇと」

カムランの頭を粉砕し、動かなくなったのを確認して休んでたけど、白い信号弾を撃って二人に終わったことを伝える

カオル「っと、素材も回収しておくか」

そう思って立ち上がりカムランの亡骸の近くに行き・・・右腕の関節の黒い生体パーツを変形させ『捕喰形態（プレデターフォーム）』にし、カムランの亡骸に喰い付かせる

カオル「う～ん・・・流石にそこまで珍しいものは無いな、強いて言えば騎士血石ぐらいか」

このカムランは結構強い個体だと思ったんだが・・・と、回収してる間にスプリングとサマーがこっちに着いた

スプリング「あ、ホントに終わったみたいね、頭粉砕してるし」

サマー「その様だな、素材の方は如何だった？」

カオル「そこまで珍しい物は取れなかったよ。で、これでテスト完了か？」

スプリング「多分ね・・・あれ？、カオル、ランチャーは？」

カオル「あ、忘れる所だった」

スプリングに言われてランチャーを切り離したのを思い出し、回収する

カオル「危ねぇ危ねぇ、危うく忘れる所だった」

スプリング「もう、シッカリしてよね」

サマー「お前達、喋ってないでさっさと戻るぞ」

そんな感じで地下研究所へ戻る

～地下研究所～

シキ「うむ、今回の戦闘で良いデータが取れた、有難うカオル君」

カオル「気にすんな。で？、俺は今から如何すればいいんだ？、今回で終了でアナグラに戻っても構わないんだろう？」

シキ「ああ、今まで有難う。君も十二分にアストレアを使いこなしている様だし、安心して極東支部に帰らせられる」

カオル「そっか。じゃあシーズン達に挨拶してから行くわ」

いざ帰るとなると、何だか感慨深い物だな。まあ何だかんだ言って二年は付き合ってきたわけだしな

シキ「ああ、帰るついでに向こうでテストして欲しい装備があるのだが、良いかね？」

・・・・・この爺さんは相変らずだよまったく

カオル「ああ、で、その装備ってのは？」

シキ「君が使っていた『ドラグノフ』をアストレアに合わせて作った装備だ、餞別だと思って持って行きたまえ」

カオル「おお」

アストレア用のドラグノフか・・・サンキュー、ドクター

～研究所前～

カオル「さて、暫しの別れだなお前ら、元気でな」

そう集まったシーズン達に言う。ちなみに俺の今の格好はアストレアを纏って、顔の部分だけ変形させて開いてる状態だ

ウィンター「ああ、君も元気で。機会があれば一緒に戦いたかったけどね」

オータム「ドクターが後日、今まで開発した装備を本部経由で極東支部に送るそうです。その時に私達も何か送れれば良いのですが」

サマー「お前がそう簡単にくたばるとは思えんが・・・達者でな」

スプリング「また会えたら一緒に遊ぼうね～」

そう皆が言葉をかけて来る、って言うか爺さん・・・

カオル「じゃあ」

ウィンター「あ、待ちたまえ。ドクターから君に言っておけと言われた事があるんだ」

ん？俺に言っておくこと？

ウィンター「「シックザール支部長、そしてオオグルマという男に気を付けろ」と」

カオル「支部長と・・・誰だそいつ？」

オータム「たしか・・・フェンリル・ロシア支部にその名前の医師がいます」

カオル「ロシア支部？何でそんな極東から遠く離れたところにいる男に・・・？」

サマー「俺達には何とも・・・だが、ドクターが言うんだ、気を付けるに越したことは無い」

スプリング「はいはい、何だか暗そうな話はそこまで！。折角カオルが仲間のところに帰るんだから、ね？」

スプリングにそう言われ、はっ！、とする俺たち。それもそうだったな

カオル「そうだった、サンキュースプリング」

スプリング「どういたしまして・・・じゃあ、またね？」

カオル「ああ、じゃあな！、縁があったらまた合おうぜ！！」

そう言って走り出す俺、後ろではシーズン達が手を振って得いるようだ・・・

・・・さて、戻る途中に『鉄塔の森』があった筈だけど、大丈夫だろうな？

第三話（後書き）

お目汚し失礼

ピクシブで『へたれイーター』を読んで面白すぎて笑いまくりました

何度かそのネタが入る可能性があります

ＡＣＥを知っている人は気付くと思いますが、サマーとスプリングの神機は

彼らがゲーム内で使用していたプラントのスタンド・コアを神機化した感じです

では、また次回

第四話（前書き）

なんか、声優さんが同じだから出した。反省と後悔しかない・・・

ではどうぞ

第四話

～現在地・『鉄塔の森』近辺～

さて、基本ブースト移動、偶に歩いて移動してる訳だが。もうそろそろ『鉄塔の森』に着く頃だな。昔は何かの工業地帯だったようだが、今では『グボロ・グボロ』を始めとしたアラガミ共が現れる場所の一つとなってしまった

グボロ・グボロと言えば、ドクター達の所に居た時に黄金のグボロ・グボロの目撃情報があったな。ホントにいたのか？そんなの

なんてこと考えてたら既に鉄塔の森に到着したらしい。っていうか此処獣道じゃなイカ！・・・ん？何かおかしかったな、とりあえずとっとと降りる。すると、2年前にミッションに出た頃と同じ景色だ、相変わらず霧の濃い場所だ。・・・ん？話し声？

？「お前なんで付いて来た？、今回はルーキーとの顔合わせミッションだと言われたんだが」

？「僕もリンドウさんに言われて来たんですよ、と言うか何では無いでしょう何では、一応僕も第一部隊なんですけど？」

・・・・・アレ～？ドッカデ聞イタコトアル声ダナ～・・・２年ぶりに会うのがあいつ等か。まあ、何時もつるんでるけどさ（内一人は引き摺り回すとも言う）

さて、隠れてないでとっとと姿を・・・ん？誰か来たな、女？

背中まで伸ばした黒い髪と水色の瞳、服装は、ハルシオンの制服？

？「さて、他の人が先に着いている筈だけど・・・あ、いた！」

新人か？、そういえば神機は・・・？見た感じはバスターブレードの近接式だが、何かおかしいな

？「ん？ああ、君が例の新人さんだね。僕はエリック、エリック・デア＝フォーゲルヴァイデ。君も皆や僕を見習って、人類のため華麗に・・・なんて言える世の中じゃ無いけど、共に戦って行こう」

？「はい！」

ちゃんと先輩してる様だな、よかったよかっ・・・なっ！？拙い！！

「「エリック、上だ！！」」

エリック「え？・・・っ！？」

そう言われた瞬間エリックは疑問顔だったが直ぐに自身の神機の銃身『２８型ガット』を上から降ってきたアラガミ『オウガテイル』に向けようとする、が、その前に俺が撃ったバレットが空中からオウガテイルを攻撃して叩き落とす・・・あーよかった・・・

？「あ・・・」

新人さんもびっくりしてるがこっちも肝が冷えたよまったく・・・

？「ようこそ、クソッタレな職場へ・・・」

そう新人に話し始めるフードを被った青年・・・ソーマ

ソーマ「俺はソーマ・・・別に覚えなくていい。・・・言っとくが、ここではこんな事日常茶飯事だ」

そう言ってソーマは自分の神機の黒いノコギリ型の刀身『イーブルワン』の切っ先を少女に向ける

ソーマ「お前はどんな覚悟を思って『ここ』に来た？・・・・・・なんてな。」

エリック「ソーマさん、それよりさっきのバレットは」

ソーマ「ああ・・・・・・其処に居るんだろう？隠れてないで出て来い」

まあ、空中から撃つ制御弾とはいえ、銃声はするからな・・・まぁそもそも隠れる理由が無いからして、さっさと姿を見せる

？「へ？」

エリック「え？」

ソーマ「あ？」

姿を見せた途端に吃驚する三人。まぁ見た目完全にロボットだから仕方ないけどさあ

カオル「言われたとおり姿を見せたってのにその反応は無いんじゃないの？」

エリック「！？、その声は！？」

ソーマ「お前、まさか・・・！？」

声を聞いて再び驚く二人と、何が何だかという顔をした新入りの少女。まぁあの状況じゃあ生きてる方がおかしいけどさ・・・その前に

カオル「事情は後で説明するから、まずはあいつ等を片付けようや」

持っている銃『ドラグノフ２ｎｄ（セカンド）』の銃口を、こちらを発見したオウガテイル二体と、『コクーンメイデン』二体に向けて三人に言う

ソーマ「っち・・・行くぞルーキー、エリック」

エリック「ちゃんと如何言う事か説明してもらいますよ！！」

？「な、何がどうなってるの・・・？」

ソーマとエリックは二人で組んでコクーンメイデンを仕留めに行って、残ったのは少女と俺だけである

カオル「さて君、名前は？」

？「え、さ、佐天ルイコです。あの、あの二人と知り合いですか？」

カオル「その辺の説明も一緒にするから、先ずはこっちを如何にするぞ。コクーンメイデンはあいつ等が仕留めに行ったから、俺らはオウガテイルをやるぞ」

ルイコ「は、はいっ！！」

そう返事をした少女『佐天ルイコ』は神機の形を変え・・・って変形！？この子『新型』だったのか・・・変形させた神機の銃身はレールガンに似た黒い、少し傷ついた銃身・・・『ドラグノフ』だった

カオル「君、その銃身パーツは・・・？」

ルイコ「？適合試験の時からこの神機に装備されていた物ですけど・・・そういえば貴方も似た銃を使っててますね」

カオル「・・・いや、何でもない」

誰かは知らないが、新型にドラグノフを使ってもらおうと思ったわけか。まあ、誰にも使われずにお蔵入りになるよりは俺もその方が嬉しいがな

カオル「じゃあ俺はあいつ等に突っ込むから、君はその銃で援護してくれ。誤射はしてくれるなよ？」

そう言って俺はドラグノフ２ｎｄを腰に取り付け『素手』の状態になり、スリーブースターを吹かしてオウガテイルに突っ込む

ルイコ「ちょ、ちょっと！、素手でなんて危険ですよ！！」

そう文句を言いつつホーミングレーザーでオウガテイルを撃つルイコ。怯んだ隙に懐に入り込む

カオル「相棒、銃に供給する分のオラクルを腕に回せ」

腕にオラクルを収束させ、発光し出したのを確認して・・・そのデカイ顎にアッパーを撃ち込む！

強靭な筈のアラガミの体に若干喰い込んだのを確認した直後に、オウガテイルは斜め上に吹き飛んだ

ルイコ「・・・・・え？」

神機の刀身パーツは、刃に集まったオラクル細胞で、アラガミのオラクル細胞結合を『喰い斬る』という仕組みで、俺がやったのは拳に集まったオラクル細胞で、細胞結合を『喰い砕く』といった感じになる、要は斬るか叩くかの違いだ。更にアストレア自体パワーで殴り飛ばしたわけだ

一撃とはいえ相当ダメージを喰らった様で、この間にもう一体に近づき、顔に右左の順にラッシュを撃つ

カオル「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！！！」

そんでもって最後に、踵落としぃ！！

カオル「せいやぁ！！」

地面にめり込む勢いで地面に叩き付けられたオウガテイル、既に息絶えていた、よし次は

ルイコ「たぁ！！」

ルイコの声と同時に何かを叩き斬る音が聞こえた、まぁ何かって言ってもアラガミしか無いんだろうが。サキの方を見ると、刀身『クレイモア』から発生した紫色の刃でオウガテイルを真っ二つにしていた

ソーマとエリックの方を見ると、二人とも一体ずつ仕留めていた

ルイコ「これで終りみたいですね」

カオル「そうか・・・さて、あいつ等にどう説明すればいいのやら」

ルイコ「・・・ところで何が何だか分らないんですけど、あなたの名前は？」

ああ、この娘に自己紹介するのを忘れるところだった

カオル「俺は九条カオル、極東支部所属の狙撃兵曹長だ。・・・まぁ『元』が付くかも知れないが」

ルイコ「？それは如何言う・・・」

エリック「その人は2年前にＭＩＡとされたんですよ、第一種接触禁忌スサノオ、そして複数のヴァジュラに襲われて」

そう言いながらソーマとエリックが戻ってきた

ソーマ「さて、どういう事か説明してもらうぞ。２年前、あの状況でどうやって生き残ったのか、そして今まで何処に居たのか」

エリック「ついでにあなたが身に纏ってるその・・・えっと」

カオル「パワードスーツ」

エリック「そう、そのパワードスーツについてもキッチリと！」

全く急かしてくれるよホント

カオル「わかってるって、とりあえずアナグラに戻る道中で説明するよ。早く戻ろうや」

ルイコ「私も、どういうことかサッパリで、説明してくれませんか？」

カオル「はいはい」

やれやれ、騒がしい奴ら

――――――――――――――――――――――

～現在地・フェンリル極東支部『アナグラ』～

カオル「・・・・・・という訳で、まぁ俺が助かった経緯はそんな感じだ。他に聞きたいことはあるか？」

そういって2年ぶりに会った第1部隊のメンバーに聞く

リンドウ「特に聞く事は無いな、とりあえず・・・よく無事に戻ったな」

カオル「そう簡単にくたばって堪るか、それに命令はある程度守る方なんで」

そんな会話を隊長のリンドウさんとしていると、後ろから女性が話しかけてきた

ツバキ「本当に、よく無事に帰ってきてくれたな、少尉」

カオル「お久しぶりですツバキさん、だからそう簡単にくたばって・・・・・少尉？」

何、どういうことなのは

ツバキ「本部からの通達でな。お前は2年前のミッションでの活躍が認められ昇格、現在は狙撃少尉という訳だ。戻って早々忙しいだろうが、頑張ってくれ」

なんとまぁ・・・リンドウさんと同じ階級になるとは

リンドウ「あ～後、リッカにちゃんと声をかけとけよ?、お前の事相当心配してたからな」

カオル「はい」

そう言ってリッカが居る神機保管庫エリアに向かう

さて、また忙しくなるな

第四話（後書き）

お目汚し失礼、ゴッドイーターバーストをプレイしてやる気十分（？）な作者、ｓｔｒｉｋｅｒです

プレイヤーボイスに居た＋自分が好きだからと理由で

『とある科学の超電磁砲』より『佐天涙子』さんにゲームでの主人公ポジションに

好きだからやった、でも反省と後悔しかない

こんな感じで何かいろいろ増えて行くかも知れませんが、これからもよろしくお願いします

いや、確かにカオルの神機に意思がある様に書きましたよ?、でも
バーストであんな展開になるとは自分だって思いませんでしたよ・・・

第五話（前書き）

遅くなってしまい誠に、誠に申し訳ありません

文化祭があったり、アイデアがなかなか出なかったりと色々あったもので

では本編をどうぞ

第五話

～アナグラ・エントランス～

さて此処はアナグラに居る連中の憩いの場になっているエントランス。ここで何をしてるのかと言うと・・・する事が無くて暇なんだよな～・・・

・・・って違う！！する事が無いんじゃなくて、新人二人組とミッションに行って来い、とリンドウさんに言われたんだよ。討伐対象は『シユウ』、場所は『煉獄の地下街』で近くにコクーンメイデンも居るらしい。そんでその新人の内一人はこの間あったルイコらしく、もう一人はその同期の『藤木コウタ』というらしい、でここで待ってるわけだが

いい加減来ても良いんじゃないか？

ルイコ「あ、先に来てた！、ほらコウタ急いで！」

コウタ「わかってるって！」

やっと来たらしい

カオル「遅いぞお前ら、アナグラじゃなかったら上官が口煩く自分のことを棚に上げて叱ってくるぞ」

ルイコ「なんでそんな具体的なんですか・・・」

カオル「別の支部に行った時にそんな事があったんだよ」

相当嫌な奴だったらしく、神機でホームランしても誰にも（そこの支部長にも）咎められなかったがな

カオル「さて、改めて自己紹介だ。俺は九条カオル、何故か階級上がって現在狙撃少尉だ、よろしく」

ルイコ「はい、改めまして、佐天ルイコです、新型神機を使う破目になって現在上等装甲兵です、よろしくお願いします」

コウタ「どうも、藤木コウタです！。今の階級は偵察兵っス！よろしくお願いします！」

ルイコは真面目に、コウタは明るく元気といった感じに挨拶してきた

カオル「ん～もうちょっとフランクにしてくれた方が楽なんで、堅苦しいのはなしな。さて、とっとと終わらせてゆっくりしよう」

コウタ・ルイコ「「はい！」」

元気なこって

――――――――――――――――――――――――――――

～アナグラ・神機保管庫エリア～

さて、まず神機を取りに来たわけだ

カオル「リッカぁ！神機の整備はどんな感じだ？」

リッカ「あ、来たね少尉さん」

カオル「その少尉さんてのは止めてくんね？、で俺らの神機はどうよ？」

そんなやり取りをしつつ神機の状態を聞く

リッカ「準備はばっちりだよ！特に君の神機がすごく元気そうだ」

そう言われてアストレアの方を見ると、確かに、コアからそんな感じが伝わってくるな

カオル「じゃあ、早速行くか。お前らは神機もったら先に行っててくれ、俺のは見ての通り装着式なんでな」

ルイコ「分かりました、あんまり待たせないで下さいよ？じゃあさっさと行くよコウタ！」

笑顔でそんな風に言うルイコ、少しはフランクになったかな？

さて、装着開始だ。俺がアストレアの前に立つと相棒が装甲を開いて着れる様にし、そこに俺が入ると装甲を足から順に閉じ、開いた装甲の裂け目も痕型も無くなり完全に固定される。顔の部分は開いたままだがな。最後に近くに掛けてあるドラグノフ２ｎｄを腰に取

り付けて、準備完了

カオル「じゃあ行ってくるわ」

リッカ「気をつけて来るんだよ～？」

カオル「分かってるっての、子供じゃないんだから」

そんなやり取りをしてアナグラの出口へ向かう、が

リッカ「・・・あ！ちょっと待って！忘れるところだった」

カオル「？なんだ？」

急に呼び止められた、なんだよ

リッカ「本部から、君にテストしてもらいたい物があるって送られてきた武器があってね、出来れば持って行ってくれるかな？」

・・・・・アナグラに戻っても結局続くのな、新武装テスト

カオル「ＯＫ。ドラグノフしか持ってくつもり無かったし、テストしてくるから武器出してくれ」

リッカ「分かった・・・で、その武器なんだけど、分類はバスターブレード・・・でいいと思う」

思う？

リッカ「いや、サイズが馬鹿みたいに大きくてね・・・とにかく今

出すから」

そう言って、奥の方にあるケースが開かれ、中から出てきた武器は・・・・・出鱈目なサイズのチェーンソー。リンドウさんの『ブラッドサージ』のようなものか・・・って違う！！！なんだこのサイズは！パッと見６メートル近くあるんだが！？しかもよく見れば用途不明の機構もあるし！？

カオル「なんぞこれーー！！？」

リッカ「叫びたいのは分かるけど落ち着いてぇ！！」

カオル「ばるすっ！？」

突然横殴りに吹き飛ばされて壁にぶつかって止まった

リッカ「落ち着いた？」

カオル「お陰さまで、しかし何処にあったよそんなの」

リッカが殴るのに使ったであろう約２メートルサイズのレンチ（用途不明）を見ながら言う

リッカ「これについては兎も角、普通の神機使いじゃあれ・・・『チェインデカッター』っ名前なんだけど、大き過ぎて使えないから、アストレアを使ってテストしてほしいってさ」

カオル「いや、そも普通の神機使いが使えない物を作るなと本部の奴らに言えばいいだろうが」

本部の連中は机上でしか考えないからあまり役に立つものを作らない、腕輪のビーコン然り

リッカ「まあそうなんだけどね・・・とりあえずテストしておいてよ」

カオル「わーったよ畜生、っと意外と重くないな」

そんなやり取りの後に改めて煉獄の地下街へＧＯ

～現在位置・煉獄の地下街～

さて、途中でデカッターが天井やパイプに引っ掛かってすっ転んだりしたが、とりあえず到着。だいぶ時間がかかったなー無駄に

カオル「よ～待たせてすまんね新入りコンビ」

ルイコ「遅いですよカオルさん！、何分経ったと思って・・・えー何ですかそれ？、後コウタとコンビ扱いは止めてくれます？、なんか嫌なんで」

コウタ「俺アンタに何かした・・・？（泣）」

ルイコがデカッターのサイズに呆れたり、コウタがｏｒｚ←こんな姿勢になったりしたが、とにかく先に説明する

カオル「本部からテストしてほしいんだとさ、こんなバカデカい物普通の神機使いに振り回せるかっての」

ルイコ「確かに・・・パッと見た感じ６メートルはありますよねコレ」

外でならともかく、ここだと振り回しづらいな

カオル「まあ、いつまでも気にしてるわけにはいかない訳で、さっさと終わらせようや。俺が前衛でお前らが後方支援、ルイコはオラクルが尽きたら前衛に回って、オラクルが溜まったら援護してくれ。・・・まあルイコはある程度自由に動いてくれ、新型らしく状況に応じて臨機応変に」

ルイコ「はい！」

コウタ「了解！」

カオル「じゃあ早速だが索敵するか。俺が前を歩くからお前らは側面・後方を警戒してくれ」

そう言って待機していた場所を俺、ルイコ、コウタの順番で降りて索敵を開始する

～数分後～

カオル「せいやぁ！！」

そう叫びながらコクーンメイデンをフルスイングのデカッターで叩き斬る、さて・・・

カオル「いまだにシユウが見つからない訳だが、どういうことなのは」

ルイコ「この辺はマグマだらけですし、マグマの中に隠れてるとか」

カオル「シユウがそんな行動をとるなんて聞いた事無いしなぁ。それに堕天種にでもならない限り、マグマの中だとあいつ等でもお陀仏だ」

この煉獄の地下街にはマグマを捕喰しようとしてその莫大な熱エネルギーに耐えられずに自壊したアラガミが、ケロイド状になって足場のようになった場所がそこら中にある・・・・・・あ、そうか

カオル「たぶんこっちだ、自壊したアラガミの死体が調度足場になってできた空間がある。恐らくそこだろう」

ルイコ「そんな場所があるんですか？」

カオル「ああ、結構グロテスクだから気を付けろよ？」

初めて見た時は吐きそうになったんだぜ

――――――――――――――――――――――――

元地下鉄の線路の右の壁に巨大な空洞がある、その奥から聞こえてくるのは・・・足音。ここだな

カオル「奥に行くぞ。なるべく足音は立てるな？」

ルイコ・コウタ「了解」

その空洞の中に俺、ルイコ、コウタの順で入る。中はケロイド状になったアラガミの死体が固まって出来ている

ルイコ「うぇ・・・」

コウタ「気持ちわるっ」

カオル「だから気をつけろっつったろうに・・止まれ」

もうそろそろ広い所に出るから二人に止まるようにに言い、慎重に確認する・・・いた。けどなんか座禅組んでんだけど。普段はずーっと組んでる腕もといて座禅組んでんだけど・・・如何しろと

取りあえずこっちには気付いて無いっぽいが

カオル「とりあえず突っ込んで挑んで来るから、お前らは俺が一撃入れたところに撃ちまくれ。誤射だけはしてくれるなよ」

そう言ってシユウの後ろに回り込む為に移動する、出来るだけ忍び足で

シユウの真後ろについた、とりあえずチャージクラッシュが出来るか試すために相棒にデカッターにオラクルを回すように言う、すると・・・デカッターの刃一本一本に紫色の刃が。

とりあえず出来そうだから振りかぶり、シユウの弱点の一つである頭めがけて・・・唐竹割ぃ！

カオル「チェストォォ！！」

掛け声でこちらの存在に気付き、腕のように見える両腕羽でガードするようにクロスしようとしているがそれより先にデカッターがシユウの脳天に直撃し、結合崩壊する

カオル「今だ撃てぇ！！」

そう叫んだ瞬間に二人がいる場所からオラクルでできた弾丸とレーザーが頭を破壊されて怯んだシユウに殺到し直撃する

コウタ「やったか！」

それはフラグだマヌケ。当然くたばっている筈もなく、両腕羽と手が結合崩壊しているがシユウが怒りの形相（アラガミの表情なぞ知らんが）で仁王立ちしていた

そしてそのままどっかの波動拳よろしく両腕羽から爆炎球を俺めがけて放つがそれをデカッターで切り払い、スリーブースターを吹かして一気に接近し、デカッターの刃をフル回転させて振り下ろす、が、シユウも両腕羽を手刀のように振るい、鍔迫り合いの様な状態になった

カオル「やるじゃねーかおいえ?、だがチェーンソー相手に手刀で鍔迫り合いは失敗だな」

シユウ「？・・・っ！？」

何を言ってるのか分らんって顔（アラガミの表情なぞ以下略）してたが、血のような液体を吹き出しながら切断されていく自身の両腕羽を見てやっと如何言うことか分ったようだが、もう遅い！

カオル「相棒、腕の出力を上げろ！」

？「了解。両腕部出力上昇」

カオル「をぬ！？」

けど気にしてる余裕がねー！！とりあえずデカッターをシユウごと振り回しルイコたちの方に吹っ飛ばす！

カオル「うぉりゃあああ！！！！」

コウタ「いっけぇぇぇ！！」

まずコウタが自身の神機の銃身『モウスィブロウ』から撃ち出した大量のオラクル弾で吹っ飛ばしたシユウを蜂の巣状態にしていき、ラストに

ルイコ「いらっしゃ～い・・・！」

チャージクラッシュの準備が完了したルイコの方にそのまま飛んで行くき

ルイコ「たあぁぁぁぁ！！！」

そのまま振り下ろしで叩き斬りシユウを頭から真っ二つにし。戦闘終了

――――――――――――――――――――――――――――――――

ミッション完了か

カオル「取りあえずミッション完了だな、シユウも動かねーし」

ルイコ「ですね」

コウタ「いや～楽勝だったね！」

ルイコ「戦ったのほとんどカオルさんだったでしょうが！調子に乗らない！」

コウタ「わ、わかってるって～」

ミッション完了して、素材の回収したのでアナグラに戻る途中、ルイコとコウタがそんなやり取りをしていて騒がしいなホント

カオル「お～いお前ら、置いて行っちまうぞー？」

まあ、こんな感じがアナグラの日常だ

第五話（後書き）

お目汚し失礼

ほとんどストーリー関係ないですね

コウタとの顔合わせがメイン（？）って感じです

あとシユウはなんかあんな姿勢が似合いそうだったからって感じです

では、また次回

第六話（前書き）

遅くなって大変申し訳ありません！

あと今回から自分が気に入ったロボット物のネタが本編に絡んでくると思いますが、それでも大丈夫だという方は、どうぞ

第六話

～アナグラ・神機保管庫エリア～

さて、シユウをフルボッコにしてアナグラに帰ってきたが、一つ確認しておきたい事がある。あの時俺に話しかけてきた声の正体・・・と言っても大体予想は着く、俺にしか聞こえた様子は無かったし、声の言った内容も「了解」とか言ってたし、この声の主は十中八九

カオル「お前なんだろ？、相棒」

？「はい、挨拶も無しに失礼しました」

いや、そうじゃなくてだな

カオル「お前、喋れたのか・・・今まで気付かなかったんだぜ？」

？「音声を出せるようになったのはアナグラからの移動時間を含め１９分３６秒後、地下街に到着し、シユウと戦闘を開始した直後です」

カオル「・・・また正確に覚えてんなお前。ところで、何でまた喋れる様になったんだぜ？、理由が今一分からんぜ」

？「音声がある方が貴方の戦闘その他をよりサポートし易いと判断したからです、敵の不意打ちにも警告出来ます」

まあ確かに。とりあえず相棒か喋れるって事は分かった、問題は

カオル「相棒に名前を付けようと思うんだぜ、と言う訳でそこで盗み聞きしているリッカ君、こっち来るんだぜ」

リッカ「盗み聞きも何も私が居るのに構わずに話してたくせに」

どうやら俺以外にも聞こえるようで

リッカ「それで？君の相棒の名前を考えようと？」

カオル「そういうことなんだぜ。というわけで、なんかいい名前あるか？」

リッカ「う～ん声は女の子だし、ＡＬＩＣＥ（アリス）とか？」

カオル「却下で」

リッカ「じゃあＡＤＡ（エイダ）とか」

カオル「いい加減真面目に考えるんだぜ、俺も考えるから」

リッカ「いい名前だと思うだけどなあ」

いろんな理由から駄目です・・・・・・・・・・・・・あ

カオル「よし、決まった」

そして相棒に、思いついた名前を告げる

カオル「EXA(エクサ)って言うのはどうだ?、俺的にはいい名前だと思うんだぜ」

相棒の反応を待つ

?「・・・・・・ありがとうございます、名前を考えていただいて。これからはエクサと名乗らせていただきます、これからもよろしくお願いします、カオル」

気に入ってもらえた様で

カオル「おう、よろしくな、エクサ!」

エクサ「はい、ところでカオル、今までの戦闘でアラガミから採取した細胞を利用しアストレアに機能を追加しました」

カオル「機能?」

どういうことなのは

エクサ「『グラブ』と名付けました、この機能を使えば角材、建造物の残骸、そしてアラガミをも掴む事が出来ます。掴んだモノを振り回しアラガミにぶつけたり、盾代わりに使ったり、投げつけて衝突させる等の使用法が可能です。アラガミを掴んでいる場合、壁に投げつけることでダメージを与えられます」

カオル「なるほど、かなり便利そうだな」

エクサ「今後、新たな機能を追加・使用する為のデバイスを生成していきます」

リッカ「何か物凄いのも出て来そうだね」

ほんとだよ、グラブの時点で凄いと思うが

カオル「さて、俺は疲れたから部屋に戻るわ。リッカ、整備頼んだぜ?。エクサ、次のミッションでも宜しくな」

リッカ「任せて!、それが仕事だしね」

エクサ「はい、お疲れ様でした」

そんなやり取りをして、神機保管庫エリアを後にした

〜二日後〜

さて、今日のお仕事はコンゴウとザイゴート4体討伐だ、張り切って行きまっしょい・・・とか言いつつ第一部隊は俺以外もう居なかったりする。コンゴウ討伐だそうだ、リンドウさんはデートだそうで居ない、まぁ大体予想はつくが、エリックは休暇を取って妹のエリナ嬢とお買い物・・・・・・・・・・ってな訳で

カオル「第二部隊の皆さんと来ていたりするんだぜ」

エクサ「そういうことは口に出してしゃべらないでください」

カノン「あの・・・どこに向かって話してるんですか？」

タツミ「カノーン、気にしないほうがいいぞ～、何時もの事だ」

ブレンダン「一々気にしていたらキリが無いからな」

ひどひ・・・さて冗談はこの位にして、現在地は『鎮魂の廃寺』昔リンドウさん達が住んでた地域だ。ちなみにエクサのことは、支部長と榊のおっさん以外には教えてある。支部長は信用ならんしおっさんは何されるか分からないからだ

カオル「さっそく索敵開始と行きますか？」

タツミ「だな、俺とブレ公は左から、カオルとカノンは右から行ってくれ。行くぞ！」

「「「了解！」」」

因みに今の俺の装備は本部から（という名目でシキの爺さんから）届いた専用ブレードを右腕に、シールドを左腕に装備している、エクサ曰く「これらは基本装備として装備しておいてほしい」とのことだ

待機地点から右に行って直ぐに階段がある、そこの上のほうを見ると、ザイゴートが四体ともいた、その内の一体がこちらに気付き、連鎖するように残りの三体も気付いた

カオル「早速発見か。カノン、一発ぶち込んでやれ」

カノン「はい！！」

無茶苦茶嬉しそうな笑顔で肯いてモルター弾を発射した、こっちに向かってきた最初の一体に直撃して階段に落ちた

カオル「じゃあ、俺も突っ込むわ。こっちは気にせずに撃て、いいな？」

カノン「わかりました！」

さてこれで誤射の危険性がでたわけだが、何とかなるだろ。

スリーブースターを全開にして今出せる最高速度で接近し、通り過ぎ際に斬りつける。右薙ぎ、左薙ぎ、そして唐竹割でたたき落とす！そして叩き落した処にカノンが放射で二体しとめ、残りの二体は

カオル「グラブを試してみるか、普通に掴むだけで良いんだな？」

エクサ「はい、掴んだ瞬間に腕に収束したオラクル細胞が敵を拘束します」

カオル「なるほど？、じゃあ早速！」

たたき落としたザイゴートを右手で鷲掴み、すぐ近くのザイゴートにジャンプして右から叩き付け、さらに左からも叩き付け

カオル「おまけだこの野郎！」

掴んでいるザイゴートを大きく振りかぶって・・・

カオル「ボールを相手のゴールに、シュゥゥゥゥゥッ！！！」

投げつける！。そのまま投げつけたザイゴートと一緒に壁に激突して血のような液体をまき散らして破裂するようにはじける

カオル「超！エキサイティン！！」

エクサ「はしゃぎ過ぎです」

カオル「いやすまんね、中々に楽しかったもんで」

エクサ「ありがとうございます、しかし感想は戦闘終了後に・・・ッ」

カオル「？どうしたエクサ・・・なんっ！？」

急にエクサが黙ったと思ったらアストレアに翡翠色のラインが走った。なんなんだ一体！？

カノン「あわっどっどうしたんですか！？体中に光の線が、大丈夫ですか！？」

カオル「俺は何ともないがエクサが黙りこくっちまって・・・おいエクサ！どうした！おい！？」

エクサ「・・・・・・サブウェポン『フローティングマイン』のコントロールデバイスを取得しました。オラクル細胞で構成された浮

遊機雷をその場に設置、アラガミの接近を探知し爆発します、設置した機雷はグラブで掴むことが出来ます。申し訳ありません、ザイゴートから採取した細胞からデバイス生成に必要なデータが揃ったのでそちらに集中してしまいました」

カオル「安心したけどそういう時は一言言ってくれ、頼むから・・・で？サブウェポン？」

エクサ「現在『グラブ』『Fマイン（フローティング）』の二つだけですが、様々な特性で戦闘をサポートするための特殊装備です、使用するためのコントロールデバイスは私のコア内部にあります」

カノン「へ～とっても便利そうです！」

エクサ「ですが、パワードスーツを通して起動・射出を行う装備です、旧型及び可変型神機では使用できません」

カノン「そうですか～、残念です・・・」

カオル「まぁとにかく、タツミ兄貴たちに連絡しよう。もうコンゴウとやり合ってるかも分からん」

そう言って腕輪（ちなみに腕輪も装甲で覆ってある）の通信機能でタツミ兄貴に連絡を入れる

タツミ「カオルか！？こっちはコンゴウを発見！今戦闘中だ！」

カオル「こっちはザイゴート四体を討伐完了！、すぐにそっちに行きます！」

タツミ「ああ！、できれば早く頼むぜ！？」

通信を切ってタツミ兄貴のところに向かう、が、その前に

カオル「さてカノン、先に謝っとく、すまん」

カノン「え？何でｓきゃ！？」

そう言ってからカノンを所謂お姫様抱っこの体制で持ち上げ、スリーブースターを最大出力にする

エクサ「ブースター出力最大、チャージ」

カオル「しっかり掴まってろよ！！」

カノン「はっはい！？」

エクサ「チャージ完了、跳躍」

カオル「いくぜぇぇ！！」

歳代までチャージされたブースターを一気に下方に解放し、ジャンプする。５秒も掛からずに廃寺全体が見渡せる高度に到着し、兄貴たちを探すと・・・いた！寺の一番奥にある寺院の前！

カオル「このまま急降下するぞ！カノン、着地するまでにバレットをありったけコンゴウに撃ち込め！」

カノン「りょ、了解ですっ」

スリーブースターを今度は上方に向け、降下を開始する。その間にカノンが神機の銃身『２０３式キャノン』を下にいるコンゴウに向け攻撃を開始する

カノン「喰らえ！！」

声の感じが変わった気がするけどスルーで。そのまま連射してモルター弾をコンゴウに叩き込む・・・あ、兄貴とブレンダンさんに直撃した・・・降下速度を上げる。味方の弾に当たっても怪我とかはしないが衝撃で吹っ飛ばされるわけで・・・早くつかねぇかなぁ・・・

カノン「あ、弾が切れました・・・・・・・・・・・・・・クソッ」

何この子怖い

カオル「・・・そろそろ着くぞ～」

エクサ「着地点、コンゴウ直上」

え？とか思って着地したのは「ゴアァァァァ！？！？！？」・・・コンゴウの背中でしたとさ、どんとはれ

タツミ「・・・い、いや、駆けつけてくれた事には感謝するけどな？・・・こんな登場のし方は予想外だった、ぜ・・・ガクッ」

ブレンダン「ま、まぁ・・・コンゴウは倒れこんだから、今のうちに叩いてお、け・・・バタッ」

カオル「了解そしてサーセン。ほれ、急いでたとは言え済まんかっ

たな」

カノン「い、いえ！全然大丈夫です！！」

エクサ「カオル、カノンさん、二人の犠牲を無駄にしない為にもコンゴウを」

いや、死んでないからな？生きてるからな？。とりあえずリンクエイドは後回しで、コンゴウに右腕の生体パーツを変形させた捕食形態（プレデターフォーム）の腕を喰いつかせる

エクサ「神機解放、アラガミバレットをカノンさんへ受け渡します」

カオル「ＯＫ！カノン！とどめは任せた！」

カノン「わかりました！」

カオル「先ずはこいつだ！覚悟しろよサル野郎！」

まずはエクサにフローティングマインを４つ設置させすぐにグラブに変更。まず最初の二つを両手に持ち別々に投げつけ！さらに残りの二つも掴んでいっぺんに投げる！

コンゴウ「ゴグァァァァ！！？」

よし怯んだ！この間にブースターで接近、グラブでコンゴウの顔面を鷲掴み、地面に叩きつける！更にその場で回転して遠心力をつけてぇぇ・・・真上に投げる！！

カオル「今だ！殺れ！」

カノン「はい！・・・消し飛べぇぇぇぇ！！！」

また声の感じが・・・が、発射したアラガミバレット「濃縮エアスラッグ」は落下中のコンゴウに直撃そのまま落っこちてきた時にはくたばっていた

エクサ「コンゴウ沈黙、ミッションを達成しました」

カオル「よし終わった。お疲れさん、カノン」

カノン「はい！・・・あ！？、たっタツミさんたちを起こしてきます！！」

カオル「わかった・・・さて、こっちは素材をっと」

兄貴たちを起こしにいったカノンを見送り、コンゴウから素材を取るために変形させた右腕を喰いつかせると・・・・・・またアストレアに光のラインが走った、今度は何だ

エクサ「サブウェポン『ガントレット』のコントロールデバイスを取得しました。アストレア腕部より物理衝撃を伴うバレットを発射し敵を突き飛ばすことができます。壁に激突させることで更にダメージを与えます」

カオル「敵を突き飛ばすための装備、か。こっちも使い道はありそうだな」

さて、任務は終わったしカノンと兄貴たちを迎えにいくか

その後、カノンが誤射した件でツバキさんに叱られていた。ルイコ達もいたがいろいろ疲れたから軽く挨拶だけして自室に戻った・・・ツバキさん、カノンのあれはどうしようもなさそうなんですぜ・・・

第六話（後書き）

お目汚し失礼

今回から「アヌビス・ゾーンオブエンダーズ」よりサブウェポンが入ります

・・・なんかいろいろすみません（汗

次回も見ていただけたら幸いです

第七話（前書き）

恐ろしく急な展開、しかもこの時期でアリサのこの性格は無いわー

なんて事があると思いますので、苦手な人はブラウザバックを進めます

第七話

エントランスの上の階のソファでルイコ達と寛ぎながらソーマの話のことを考える

最近ソーマが単独任務の際に贖罪の街で人陰を見た、人の気配がしたと言っている。ルイコも単独で小型アラガミ討伐に行った際に人の様な気配を感じたそうだ。そういえば最近少数でミッションを受けた覚えが無いなぁとか考えることもあるが・・・それはそうと、今日はなにやら新人が来るらしい。そのことで俺たち第一部隊が集められてるわけだ・・・ほぅら、下の階でもリッカとフェンリルスタッフの一人が話してる

女「・・・ところで聞いた？『新型』がまた配属されるらしいよ？」

リッカ「あ、それ初耳だよ。ここへ来て『新型』ラッシュだね」

女「ロシア支部から、支部長が連れてきたらしいよ？」

リッカ「へぇ・・・あっ！噂をすれば、かな」

ロシア支部・・・ねぇ、なんてこと考えてたらツバキさんが見慣れぬ少女を連れてきたので全員立ってそちらを向く

ツバキ「紹介するぞ。今日からお前達の仲間になる、新型の適合者だ」

少女「はじめまして、『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』と申します。本日一二〇〇付けで、ロシア支部からこちらの支部に配属となります。よろしくお願いします」

コウタ「女の子ならいつでも大歓迎だよ！」

男だったら歓迎しないのか？

アリサ「よく、そんな浮ついた考えで、ここまで生きながらえてきましたね・・・」

コウタ「へっ？」

なんつう上から目線な発言、いやコウタの場合は確かにもう少し自重してほしいけどさ？

ツバキ「彼女は実戦経験こそ少ないが、演習では抜群の成績を残している・・・追い抜かれぬよう精進するんだな」

コウタ「りょ、了解です・・・」

演習『では』？そう言われて頭に浮かんだのは・・・

（（アリサ「私は！新型で！二千回で！！演習なんですよぉぉぉぉ！！！」））

・・・ありえん（笑）

アリサ「そこの方！何かとんでもなく失礼な想像しませんでした！？」

カオル「なんのことやら？」

感の良い奴

ツバキ「アリサは以後、リンドウについて行動するように、いいな」

アリサ「え！？あっはい、了解しました」

ツバキ「それからカオル、お前もリンドウ、アリサと出来るだけ行動を共にするように」

カオル「えー（，・ω・）・・・はいはい了解しましたからそんなヴァジュラを素手で殴り殺せそうな目しないでください」

ツバキ「そんな目はしていない、元々こういう目つきだ」

いや、今のあんたの目を見たらスサノオも裸足で逃げ出すぞ（もともと裸足だが）

ツバキ「まったく・・・リンドウは資料等の引継ぎのため、私と来るように。そのほかの者は持ち場に戻れ、以上だ」

そう言い残してエレベーターへ向かうツバキさんとそれについて行くリンドウさん

コウタ「ねっねぇ君、ロシアから来たの？あそこってすげー寒いんでしょ？あっでも最近異常気象で温度が高くなってるって聞いたっけ？」

アリサ「こちらの新型使いの人ですね？アリサ・アミエーラです、よろしくお願いします」（スルー）

ルイコ「はじめまして、私は佐天ルイコ、気軽にルイコって読んで？私もアリサって呼ぶから」

コウタの話を尽くスルーしながらルイコと話すアリサ、コウタガックリ肩落としてるし。とりあえず挨拶しとくか

カオル「あー何故か一緒に行動するように言われたから一応自己紹介な。俺は九条カオル、これでも一応上官だが、まぁ階級は気にするな、階級を意識して連携が乱れでもしたら事だからな」

アリサ「はぁ・・・はじめまして、アリサ・アミエーラです。以後よろしくお願いします」

その後サクヤさんがアリサに挨拶したり、相変わらずソーマが厨二臭い発言かますからド突いたり、エリックが自己紹介したはいいがその後の話でイラッときてサクヤさん除き新人組みも一緒になって蹴り飛ばしたりして時間は過ぎていく・・・

ーーーーーーーーーーーーーー

～現在地：贖罪の街・出動待機場所～

さて、あれから三日ほど経った。その間にあったことといえば・・・

～回想：アナグラ・エントランス～

ルイコ「ア～リ～サっ！」（バッ）

アリサ「えっ？・・・きゃあぁぁぁぁぁ！！！？！？！？。なっなっ何するんですかルイコさん！！？」

ルイコ「いや～ごめんごめん。なんかやらないといけない気がしてさ～、スカートめくり」

アリサ「意味が分かりませんからそれっ！幸い何時もスパッツとかしてますけど、もう絶対しないでくださいよ！！？」

ルイコ「ごめんごめん、ホントもうしないから・・・・・・（たぶ

ん）」

なんて事があってな、少しはなれたところでリンドウさんが笑いながら見ててそのあと少し懐かしそうな顔をしてた

リンドウ「ははははは（懐かしいなぁ。俺も昔サクヤにやって・・・

リンドウ「世界丸見え！」

サクヤ「きゃあぁぁぁぁ！！？」

・・・その後ボッコボコにされたっけなぁ。あのころは俺も若かったしなぁ）」

～回想終了～

さて回想はこのくらいにして。今日のミッションは旧市街地『贖罪の町』にてリンドウさん、アリサ、ルイコ、そして俺の４人でシユウ２体の討伐だ・・・研究サンプルとして生かしておいた２体が捕喰の予兆を見せ始めたから処理してくれだとさ・・・ったく。それで後の３人を待ってるわけだ。そうしてるとルイコとアリサが先に来た、が、何故かアリサが俺のほうを見て吃驚した顔をして硬直しだした

ルイコ「カオルさん、遅れてすいません」

カオル「気にスンナ、昔リンドウさんが遅れて来た時なんかどう見ても酒飲んだ後なうえに酒臭かったし」

ルイコ「リンドウさんェ・・・・・・」

カオル「でアリサ、何で君は俺のほうを見てそんな吃驚した顔をしてるんだ？」

アリサ「分かってて聞いてませんか？何ですかそのロボットみたいな格好は？」

カオル「どっからどう見ても神機に決まってんだろ」

アリサ「お前のような神機がいるか・・・・・・こほん。でもそんな神機、見たことも聞いたこともありませんよ」

カオル「そりゃ、俺が装着してるこいつだけみたいだし」

爺さんたちのことだし、そろそろ2号機が完成しそうではあるが

アリサ「鎧型・・・いえ、機械なども付いてるみたいですし。パワードスーツ型、といったところですか？」

カオル「Ｅｉｎｅ　ｋｏｒｒｅｋｔｅ　Ａｎｔｗｏｒｔ（正解）。パワードスーツ型神機第一号機、全領域対応汎用モデル『アストレア』って言うらしいぜ？」

アリサ「アストレア・・・」

カオル「まぁ、この辺の説明は長ったらしくなるからまた今度にでも・・・にしてもリンドウさん遅いな・・・あっ来た来た」

リンドウさんが神機背負ってやってきましたよっと

リンドウ「お・・・今日は新型二人に期待のＰＳ（パワードスーツ）型とお仕事だな。足引っ張らないよう気をつけるんで、よろしく頼むわ」

よく言うよその二人以上にトンでもなく強いくせして

アリサ「・・・旧型は、旧型なりの仕事をして頂ければいいと思います」

カオル「いやいや、この人トンでもないから。強さ的な意味で」

リンドウ「ははっ！ま、せいぜい期待に沿えるよう頑張ってみるさ」

そう言ってリンドウさんがアリサの肩に手を置いた、途端

アリサ「ッ！！きゃあ！！」

物凄い勢いでバックステップしてリンドウさんから離れた！どういうこったい、瞳孔開いてたぞ一瞬！

リンドウ「おーお・・・ずいぶんと嫌われたもんだなぁ・・・」

アリサ「あ・・・すッすいません。何でもありません、大丈夫です・・・」

リンドウ「ふっ・・・冗談だ。んー・・・そうだなぁ。・・・よしアリサ。混乱しちまったときはな、空を見るんだ。そんで動物に似た雲を見つけてみろ。落ち着くぞ？」

突然の行動に一瞬吃驚したみたいだが、それでも冗談で空気をやわらかくしてアドバイス？をするリンドウさん

アリサ「なッ何で、私がそんなことを・・・！」

リンドウ「いいから探せ、な？。よし！先に行くぞお前ら」

そう言って先に降りて索敵を始めるリンドウさん

ルイコ「あ！待ってくださいよリンドウさん！！」

そんでそれに急いで続くルイコ。さて・・・

カオル「俺も行くかな・・・とりあえずアリサ、まだまだ実戦には慣れてないんだ、慣れない内は仲間を頼れ。そんで最後の最後って時にまだ諦めてないなら、神機を信じろ。な？」

アリサ「はぁ・・・」

カオル「じゃ、先に行っとくわ。また後でな」

そういって自分も下りて二人を追う。追いかけながらアリサの方を見ると、言われたとおり雲を探しているっと、二人に追いついた

リンドウ「・・・あいつの事なんだがな、どうもいろいろ分けありらしい。まぁこの御時世みんないろんな悲劇を背負ってるっちゃあ背負ってるんだが」

そういってルイコの方を向き方に手を置き言う

リンドウ「同じ新型のよしみだ、あの子の力になってやれ、いいな？」

ルイコ「はい・・・！」

リンドウ「カオル、お前もこいつとアリサの力になってやってくれ、頼むぞ？」

カオル「分かってるよ・・・・・・言われなくてもな」

リンドウ「そうだったな・・・よし！じゃあ行くか。ルイコお前は俺と一緒にこっちを探索、カオルは反対側を頼む、いいな？」

ルイコ・カオル「「了解！」」

リンドウさんとルイコが向かったのを確認してから俺もさっき来た道を戻って反対方向に向かう、と、アリサが降りていた

カオル「アリサ、もう落ち着いたか？」

アリサ「はい、おかげ様で。それで？あなたは何をしてるんですか？」

カオル「リンドウさんとルイコが向こうに行ったから俺は反対側を探索だよ、お前も来るか？」

アリサ「えぇ、人数的にあなたについて行った方がいいでしょうし。あなたの腕前も、見せてもらいますよ？」

カオル「・・・へぇ？言ってくれるねぇ。アリサこそ、腕が良いのは演習だけとかならない様に見せてもらうからな？」

アリサ「臨むところです」

エクサ「お二人とも、向こうにアラガミの反応を確認しましたので急いで向かってください」

アリサ「?!?だっ誰ですか今の声!?何処から・・・!?」

カオル「おぉっと?そういや紹介してなかったな。エクサ、手短に頼むぜ」

エクサ「了解。始めましてアリサさん、私は当機アストレアのアーティフィシャルCNS、エクサです」

アリサ「はぁ・・・ご丁寧にどうも・・・・ってそうじゃなくてですね!?、じ、神機のコアが!しゃ、しゃべ・・・!?」

カオル「驚くのは無理ないが落ち着け。俺だってエクサが生まれた理由が分からんし・・・とにかく、さっさとシユウを倒そうぜ?」

アリサ「は・・・はい・・・(驚く事だらけでもう何がなんだか・・・)」

エクサ「アラガミの反応は中央の教会を出て右奥にビル内部。サイズからしてシユウ種である可能性があります。反応をマーキング、マップに表示します」

アストレアの視界はセンサーやロックオンマーカー、レーダーマップ等があり、極東地区一帯のマップデータは全て入ってるらしい、っとシユウの位置がマップに出た

カオル「早速行くか・・・アリサ、こっちだ」

アリサ「了解」

やっと落ち着いたらしいアリサとビルに静かに侵入し壁の向こうを見ると・・・いた、けど・・・今度は何だあれは？『荒ぶる鷹のポーズ』だったか？何がしたいんだここ最近出没するシユウは

アリサ「すいません、何やってるんですか？・・・あれ・・・」

カオル「聞くな。この間見た奴は座禅組んでたけどさ、最近変なポーズとるシユウが多いんだよ」

なんて唖然として見てたらこっちに気付いた！ヤバ！？

カオル「アリサ、銃で援護してくれ！前衛は俺が務める！」

アリサ「了解、行きます！」

エクサ「エンカウント。『ガントレット』の使用を提案」

カオル「切り替え頼む！」

今回は場所が少し狭いから走って移動する、腕のブレードを展開してきの攻撃に備える、と、シユウは滑空するように突撃してきた。ガントレットを試す！

カオル「くらえっ！」

左腕で殴るように突き出した腕からバレットが放たれ、滑空してき

たシユウに当たった途端、シユウが体制を崩して吹き飛ばされた。が、吹き飛ばされながら両腕羽を腕のように使い爆雷球を撃ってきた、って避けらんねぇし！？と思った瞬間左腕のシールドを咄嗟に前に構え防ぐ。が、衝撃まで止められるわけがなくシユウとは反対の壁に吹き飛ばされる

カオル「ガッ！？っくってめぇやってくれんじゃねぇか」

エクサ「ダメージは軽微ですが、連続して喰らえば意識が途絶える可能性もあります。攻撃は回避を最優先してください」

カオル「分かってるって！！」

アリサ「いきます！、射線は空けて下さいよ！！」

立ち上がりブレードを構え直したところでアリサの紅いガトリング系の銃『レイジングロア』だったか？それから冷気を帯びたバレットが大量にシユウに撃ち込まれ、シユウが怯んだところで接近しブレードで斬りつける。シユウが腕羽を手刀の様に振い攻撃してくるがそれをブレードで受け止め鍔迫り合いになる

カオル「ぐっくぬぬぬぬぅ・・・！！」

シユウ「・・・・・・ッ！！・・・・ッ！？」

カオル「ぅを！？」

鍔迫り合いでシユウともども硬直していたところに俺の顔を横切ってバレットが数十と言う数が撃ち込まれシユウはその不意打ちで怯んだのでその隙にアリサの近くまで下がる

カオル「危ねぇじゃねぇか、アサルトでこんな遠くから狙うんじゃねぇ」

アリサ「それはすいません。でも私、こう見えても射撃の腕には自信があるんですよ？」

そう強気な笑顔で答えるアリサ。まぁ俺の顔も笑ってるんだろうけどな、なんていってたら爆雷球が連続で飛んできた。アリサは後ろに転がって回避、俺もブースターを使ってバックダッシュで回避する。飛んできた方向を見ると、頭が結合崩壊したシユウがデカイ爆雷球を撃ち出せる体制になっていた

カオル「じゃあとっととけりをつけるか！アリサ！誤射したらＲ－１８な仕置きしてやるかんな！！」

アリサ「お好きにどうぞ！まぁそんな事あり得ませんけどね！！」

そう話して俺はシールドを構えながら突撃、アリサはすぐ後ろからバレットを連射する。アサルトな上に殆ど真後ろだってのにこっちに飛んでくるバレットがほぼ０なのは流石というべきか？そう考えていたら今まで相手をしてきたシユウの中でも特にデカイ爆雷球をこちらに撃ち出してきた！けど残念だったな・・・

カオル「こっちは囮だバーカ！！」

アリサ「頂きます！！」

シユウ「っ！？！？」

シールドで受け止め飛ばされないよう踏ん張りながらそう言った瞬間シユウにアリサの神機が捕喰形態で噛み付いた！俺に爆雷球を当てる事だけに気をとられてアリサの存在を後回しにしたのが失敗だったな。俺の後ろから飛んできていた大量のバレットが途絶えていた事にも気づかないとは

アリサ「神機開放・・・！！」

カオル「一気に畳み掛ける！」

アリサ「了解ッ！」

まずアリサがステップで斬り抜けながらシユウの足を切り裂き、そしてアリサが離脱すると同時に俺がジャンプしながらシユウの両腕羽を斬る！サイクルが乱れてアリサか俺が攻撃を喰らい吹き飛ばされたときには、一旦離れて回復弾を攻撃を喰らった方に撃ち、ポジションを変えながら攻撃する。そして！！

エクサ「アラガミバレットを受け取りました。神機連結解放、濃縮バレット、スタンバイ」

カオル「こいつでしとめる！」

アリサ「これで！！！」

俺が右手に持ったドラグノフ２ｎｄから放たれた『濃縮連撃爆雷弾』とアリサが突撃しながらジャンプし、シユウの頭上を宙返りしながら放った『インパルスエッジ』同時に決まり、シユウは前のめりに倒れた

エクサ「オラクルＣＮＳ反応低下、討伐を確認しました」

カオル「了解。やるじゃねぇか？アリサ」

アリサ「あなたこそふざけてる割にはやりますね？少し見直しました」

カオル「そいつはどうも。さて、早くリンドウさんたちと合流したいがその前に」

アリサ「素材の回収ですね？それくらい分かってます」

そう言ってアリサの神機と俺の右腕から発生した牙がシユウの遺体に喰らいつき、素材を回収する・・・と同時に、またアストレアの体中に光のラインが走り出した

アリサ「ちょッ！？何ですかそれ！？大丈夫なんですか！？」

カオル「大丈夫だ、これはエクサが何か新機能を手に入れたときの反応だ」

アリサ「そ、そうですか・・・」

エクサ「遠距離戦闘システム『ショット』を取得しました。アストレア腕部よりオラクルバレットを発射し攻撃することができます。連射性を重視したノーマルショット、攻撃力を重視したパワーショット、神機開放時にオラクルを収束して放つバーストショットの三種類があります」

カオル「様は銃器要らずで遠距離戦も出来るわけだな？どの程度の

威力かは今度訓練スペースを借りれればそこで計測とかできるが」

アリサ「相当特殊みたいですね。アストレアも、エクサも、そしてそれを難なく使いこなすあなたも」

カオル「俺もかよ。確かにそういう自覚はあるけどさぁ・・・」

アリサ「って、そんなことより早く合流しに行きますよ？いつまでも話しているわけにも・・・」

エクサ「上空より何かが接近。警戒してください」

カオル「なに！？」アリサ「っ！！」

アリサは神機を銃形態にし、俺もブレードとガントレットをスタンバイして上空を警戒する

カオル「エクサ、何が接近している？形状は？」

エクサ「識別不明、接近する物体によりジャミングされています。形状は人型」

アリサ「人型？一体どういう」

エクサ「来ます」

カオル「・・・・・・っ！？ぅおっと！？」

エクサの一言とともに上空から赤い光のとともに、若干人型から離れた形状の鎧のような者・・・白と薄いグレーのカラーリング。胸

部に紫色の水晶状の何か。腰と肩から伸びた何かがちょうどXの形になっており、顔に当たる部分には四つの目が同じ具Xの形で並んでいる・・・何かが、その指から伸ばした赤い光の爪を振るい、俺がそれをブレードで受け止める。危ねぇ・・・

カオル「何なんだこいつは！？」

エクサ「活性状態のオラクル細胞およびオラクルＣＮＳの反応を感知。その物体は、アラガミです」

アリサ「アラガミ！？これが・・・！？」

カオル「く！アラガミだってんなら、ぶっ潰すだけだ！！」

ブレードで鎧のようなアラガミの爪を押しのけその胴体に向かってブレードを振るう、が、鎧アラガミの頭からＳＳサイズ以下の小さいバレットの様な物が発射され妨害され、その間に鎧アラガミは後ろに下がるが、アリサがレイジングロアで鎧アラガミの右腕を撃ち抜く、が、ダメージは薄いようだ

アリサ「くっ！浅い！」

そう言っている間に鎧アラガミはまた上空に戻っていったその行き先には・・・っ！？

アリサ「な・・・なんなんですか・・・あれは・・・？」

エクサ「オラクル細胞反応、およびオラクルＣＮＳの反応を感知、規格外のサイズですが、アラガミと見て間違い無いかと」

アリサ「アラ・・・ガミ・・・・？あんな巨大なアラガミがいたなんて、聞いたことが・・・」

カオル「俺だって分かんねぇよ・・・だが、なんで奴は何もしてこない？」

そう話している間に、鎧アラガミは超高高度飛行している戦艦のようなアラガミの中に入っていった・・・なに？

エクサ「どうやら、あの巨大アラガミは準人型アラガミの母体、または母艦と艦載機のような関係にあると思われます」

アリサ「巨大な空を飛ぶ母艦と人の様な姿をした鎧型のアラガミ・・・」

カオル「・・・とにかく、奴はこのまま極東地区を離れる方向に進んでる、暫くは放っておいても大丈夫だとは思うが・・・」

アリサ「そう、だといいんですが・・・とにかく、二人と合流しましょう」

カオル「ああ。エクサ、リンドウさんたちは？」

エクサ「現在教会横の広場にて交戦中」

カオル「そっか・・・アリサ、一先ずあのアラガミの事は忘れろ、奴のことはミッションを終わらせてから考えるぞ」

アリサ「りょ、了解しましたっ！」

早足で二人がいる方向へ向かうアリサ、その後を早足で追いながら考えていた

カオル「（まさかあいつが・・・6年前、任務でリンドウさん達といったユーラシア大陸で見たあいつがアラガミだったとはな・・・）」

さて、今後どうなっていくのか・・・それこそアラガミじゃない、本当の神しか知らないことだろうな・・・

第七話（後書き）

お目汚し失礼

アリサの性格こんなんでいいのか自分・・・

へたれイーターのネタを入れたつもりですが、分かりますかね？

そして急展開といった理由、謎の鎧のような準人型アラガミ、は、特徴聞けば知ってる人は知ってますよね

そしてプロモーションアニメでの戦いに参加したという設定にして

そのときに見たという設定の、巨大アラガミ

サイズはウロヴォロスを軽く上回る設定のつもりです

では、次回もできれば期待してお待ちください

6年前（前書き）

次の話のねたを考える間のつなぎ的な

とりあえず、見てやってください

6年前

あの戦艦アラガミを見たのは・・・・・そう、6年前のあの時だ。
俺がゴッドイーターになって初めての実戦の時。リンドウさん、ツバキさん、そしてソーマと赴いた旧ロシアの地での初陣の後だ・・・

～西暦２０６５年～

～ユーラシア大陸・旧ロシア地区・連合軍作戦司令本部～

吹雪が吹き荒れるこの基地に、一機のヘリが到着した。所属は

『フェンリル極東支部』

ポートに着陸したヘリから降り立ったのは・・・狙撃服を着た凛とした女性、フェンリルの制服を着た中世的な青年、紺色の服のフードを被った白髪の少年、そして頭にリボンを結び肩の部分の無い紅と白の巫女服のような服を着た中性的な少年・・・・・ってあれ？

巫女服？少年「ツバキさん、出発前に落とし穴に落としたのは謝りますから着替えさせてください。真面目に寒いし晒し者です」

女性（以降ツバキ）「却下だ、この作戦が終わるまではその服装でいてもらうぞ。これは命令だ」

青年「まぁ、姉上に悪戯した少年が悪い、諦めろ。それに良いじゃないか、似合ってるし」

ツバキ「リンドウ、任務中に姉上と呼ぶな」

巫女服？少年「リンドウさんマヂで勘弁してください。後、似合ってるとか言わんで下さい、心が折れそうです。ソーマ、お前からも何とか言ってくれ」

フードを被った少年（以降ソーマ）「自業自得だ」

巫女服？少年「ひどひ・・・」

どうやら出発前に何かあったようだ。そのフェンリル一考に声をかける連合軍人

軍人「フェンリル極東支部の方々ですね！？。お待ちしておりました！！」

その光景を窓から見ていた人物が一人。この基地を指揮している人物だ。階級は大尉

大尉「どういうことですかなシックザール支部長？。この大事な作戦を前に、「フェンリル極東支部からの支援はたった四名だ」と。そう本部に報告しろと？」

男性『落ち着いてください。大尉殿』

それを旧日本地区・フェンリル極東支部『アナグラ』にて携帯端末で大尉と会話をする人物『ヨハネス・フォン・シックザール』支部長

ヨハネス「彼らの働きは、一人一人が『一個大隊』に値すると自負しています。それに、今回はあなた方主導の作戦だ。うちの支部は後処理担当が本領ですから」

大尉「ぬぅ、しかし！」

ヨハネス「それに恥ずかしながら今回は、私の愚息とその同期の新人の初任務でしてね・・・よろしく頼みますよ」

そうして大尉の返答も待たずに一方的に通信を切るシックザール支部長。その表情は、何かを企んでいるようだった

ヨハネス「（旧人類最後の足掻きだ、しかと見届けて来てもらうとしよう）」

そして司令基地では、大尉が怒りの形相で端末を投げ腕を机に叩きつけていた

大尉「グゥゥ・・・！！。あれがアラガミに対抗できる唯一の存在神機使いだと！？ただの子供じゃないか！！」

補佐官「まったく腹立たしい話ですね。あんな連中に取って代わられるなどと」

大尉「認めはさせんよ、この作戦が成功すればな！」

現在地～ブリーフィングルーム～

大尉「本掃討作戦は、ユーラシア地区のアラガミを戦略地点である核融合炉に誘導し、爆破させる事によって一気に殲滅するという。かつてない、大規模な作戦である」

ブリーフィングルームにて、集まった兵士たちに作戦を説明する大尉。集まった兵士たちの更に後ろには、フェンリル極東支部から来た神機使いの４人

大尉「フェンリル支部派遣の神機使いの諸君には、アラガミ達を戦略地点まで誘導する言わば、羊飼いの役をお願いする事になる」

そして後ろを余人を見て小さく聞こえる舌打ちや罵倒の声。が、小さい声ながら場は静まっている上、身体能力が強化された神機使いには丸聞こえである

リンドウ「ふぅー・・・おい少年たち、今回が初任務なんだろ？リラックスしていこうや」

ソーマ「少年じゃない。ソーマだ」

リンドウ「おぉっと、こいつは失礼。もう一丁前らしい」

ツバキ「からかうのは止せ、リンドウ」

巫女服？少年「って言うか、ホントに着替えさせてください。なんか軍人が何人かやらしい眼でこっち見てきてんですけど」

言われてツバキが見た先には。巫女服？少年を見て鼻の下をのばしたり、下卑た欲求むき出しで見る者など。だめだこの駄軍人ども早く何とかしないと

ツバキ「あー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・却下だ。カオル、気持ちはわかるが一応罰だ、我慢してくれ」

少年（以降カオル）「チクショー！。もう開き直ってやんよ！見物料ふんだくってやんよ！！」

もはや開き直ったといった感じの少年ことカオル。その両手には何時の間にか「ＯＳＡＩＳＥＮ」と書かれた箱がある

リンドウ「おいおい、どっから取り出したんだその箱」

そんで気づけば箱に、なぜか“円”単位のお金を入れていく軍人たちが

ソーマ「・・・いや、おかしいだろ」

ツバキ「気にしたら負けだろうな」

リンドウ「で？一気にどんくらい稼いだのかなっと・・・あれ？」

軍人の波が引いたので賽銭箱（仮）の中を覗いて見るリンドウ。だが

リンドウ「っかしいなぁ・・・あんだけ大量に入れてた筈なのにすっからかんだ」

そうすっからかんである。下手すれば１０万単位の量が入れられてた筈が、賽銭箱（仮）の中身は空っぽである

カオル「気にしたら負けだと思ってる。こっち来る前にも入れて貰ったんだけど、覗いて見たら空っぽだったし」

リンドウ「じゃあその賽銭はどこに行ったんだ？」

カオル「さぁ？」

見物料を取る数分前～旧日本・アラガミすら侵入できない謎の場所～

一方、かつて日本と呼ばれたこの地で、未だアラガミが入り込んだ様子がない・・・いや、その存在を知っているのかすら怪しいとある場所の、とある神社に少女が二人

？「相も変わらずな～んにも入ってないな、おい。神社として大丈夫かこれ？」

賽銭箱の中を覗き込みながらもう一人の少女に問いかけるのは、白と黒のスカートに三角帽子の、如何にも「魔法使い」といった服装の少女（以降：白黒）

？「大丈夫なわけないでしょう・・・いや、生活に困ってる訳じゃないのよ？異変を解決した報酬がかなりあるからどちらかと言うと裕福だし、でも巫女としては賽銭がこう毎日毎日無いっていうのはなんか悲しいわ・・・」

そう答えるもう一人の少女は、同時刻にカオルが着ているのと全く同じ、肩の無い紅と白を基調とした巫女服の少女（以降：紅白）

白黒「さて、あたしはそろそろお暇するぜ」

紅白「あっそ、せいぜい道中気をつけなさい」

そう言ってどこかへ行こうとする白黒と見送る紅白。と、その時賽銭箱の中から音が、こう、硬い物が落ちたような

紅白「？、何の音？・・・・・・・え？」

賽銭箱の中身を覗いてみた紅白。その中には・・・５００円硬貨が

白黒「おーい、どうしたんだぜ？中になんか・・・・・・お？」

気になったのか戻ってきて賽銭箱の中を覗く白黒

紅白「・・・入れたのあんた？」

白黒「いや、あたしは何も」

そう話していたら、二人が見てる前でいきなり１００円硬貨が何枚も連続で音を立てて賽銭箱の中に“突然”出てきた

紅白・白黒「・・・・え？」

次の瞬間・・・千円札や万札含めて大量のお金が箱の中から溢れ出る勢いで出てきた

紅白・白黒「ちょ、なんぞぉー！！！？！？」

後にこの出来事は、この地で「お賽銭大量異変」と呼ばれたそうだ

場所は旧ロシアに戻る

カオル「まぁ気にしたら負けです、何度も言いますが」

ソーマ「・・・・・・っ！！」

突然目を見開いて立ち上がったソーマ少年。次の瞬間、基地全体を激しい揺れが襲う

ソーマ「・・・・・・来やがった・・・・！」

先ほどの揺れの正体それは・・・アラガミ

核融合炉の防壁前にアラガミの大群が突然強襲して来たのだ。軍人達は対アラガミ用に改良したライフルで少量のオラクル細胞が付着した弾丸を放つが、その程度の改良で何とかなるほどアラガミとい

う存在は甘くはない。銃弾の大半は虚しく弾かれ、効いたとしても到底倒せるものではなく、結果、成す術も無くアラガミ達に貪られ喰い千切られていく軍人たち・・・それでも融合炉の準備が整うまで、彼らは命を賭してアラガミ共を食い止めていた

そして指令基地では大尉と補佐官が融合炉の調節室までの道を急ぎ足で歩んでいた

大尉「状況はどうなっている！」

補佐官「融合炉周辺にアラガミ群体が強襲。現在アラガミは第一次防壁を突破、第二次防衛ラインで応戦中です」

大尉「誘導は必要なかったようだな。融合炉の臨界は？」

補佐官「はっ、急点火しましたが、まだ４０％という所でしょうか。爆破可能までには時間が掛かりますが、神機使いを今向かわせましたので、何とか持ち堪えられるかと」

大尉「ふん。それまで奴らには、張り付いてもらうしかあるまい」

補佐官「ええ。いざとなったら、羊飼い諸共・・・」

次の瞬間と追っていた通路のすぐ後ろの壁を突き破り、アラガミ「ザイゴート」が襲い掛かる

補佐官「下がってください！っグオァァ・・・！！！」

大尉を守るためハンドガンで攻撃するも、ザイゴートには殆ど効かず、突進する勢いそのままに、補佐官はザイゴートに喰い千切られ

た。そしてザイゴートの次の狙いは、ハンドガンを構える大尉だ

大尉「化け物めっ！！」

現在地～融合炉：第二次防衛ライン上空～

そこに、神機使い４人を乗せたフェンリル所属のヘリはいた。すぐ下の大地では、軍人達を一方的に喰らっていくアラガミの大群

リンドウ「ウヨウヨいやがる！」

ツバキ「融合炉の準備が整うまでの時間稼ぎだ！」

リンドウ「へっ、羊にしては凶暴そうだ！」

ツバキ「行くぞ！一匹も通すな！！」

ツバキの合図とともにツバキ、リンドウ、ソーマ、そしてカオルの順でヘリから飛び降りていく。そして着地という時、ソーマが手始めとばかりに直下にいたザイゴートを黒い神機の刃「イーブルワン」で突き潰す。そしてアラガミ達が神機使い達を注目し始めたところで、リンドウが紅いチェーンソー「ブラッドサージ」を構え突撃し、アラガミ共を“一撃で”斬り殺してゆく。そう、軍人たちでは手も

足も出ず、ただ自分達を喰い殺していたアラガミ達を、その一太刀で仕留めていった

ソーマも、初陣とは思えぬ動きで飛び掛る「オウガテイル」を切り払い、「コクーンメイデン」のレーザーをかわし斬り飛ばし「コンゴウ」を斬り殺していく。そしてツバキは銃身「モウスィブロウ」から“バレット”を撃ち放ち、アラガミを一体ずつ、しかし確実に射殺してゆく

そしてカオルも・・・

カオル「おーおー、ソーマもリンドウさんもツバキさんも凄まじいねぇ。破竹の勢いっての？。俺も負けてらんねぇっての！！」

そして彼も巫女服を翻しながらその銃身「ドラグノフ・プロト」を構える、するとその銃身に電光が走り、光が収束して行きそして

カオル「狙うは後ろに引っ込んでる連中だ～ね。消し飛びな！！」

その銃身から轟音と共にカオルの倍近くあるサイズの光の柱が撃ち放たれ、後方にいた「クアドリガ」やコクーンメイデンを“消滅”させる。そしてそのまま銃身を横にずらし、アラガミを薙ぎ払っていく

カオル「♪～こりゃ凄いわ。試作品だからかね？出力調整ができるって言ってたから７０％で撃ったけど」

そしてその様子を後方から怖気づいた顔で見ていた軍人達

兵士「な、何だ・・・あいつらは・・・・・・ほんとに、人間なの

か・・・？」

その様子に恐怖を感じ“手を止めてしまった”兵士。だがこの乱戦の中で手を止めようものなら、すぐさまアラガミに喰われてしまう。そして一体のコンゴウが、その兵士を捕らえた

兵士「う、うわぁぁぁぁ！！！？！？」

そしてコンゴウがその兵士を頭から喰らう・・・直前、紅いチェーンソーがコンゴウを横から貫く、リンドウのブラッドサージだ

リンドウ「下がってろ！！」

そう兵士に言い残し、またアラガミの群れに突撃するリンドウ。その横では

軍人「ひぃぃっ！？」

ソーマが仕留めたザイゴートを神機の捕喰形態に変え貪っていた

そして、防衛部隊の兵士と共にアラガミを駆逐して行く４人。だが、アラガミの数は全く減る様子を見せない

そして基地では、満身創痍ではあるが大尉が融合炉の調整室に到着

していた。銃弾にはオラクル細胞が少量ではあるが付着しており、
至難の業ではあるがアラガミを仕留めることが出来る

そして調整室の通信装置を使い、神機使い４人を除く全兵士に命令
を出した

大尉「全兵士に告ぐ・・・総員、退避せよ・・・・・・繰り返す・・
・総員、退避せよ！」

そしてその命令を聞き、次々と撤退してゆく連合軍兵士

そして前線では、ツバキが「サリエル」をミサイル型のバレットで
撃ち落し。カオルが収束した非常に細いレーザーで、後方にいる「
ボルグ・カムラン」を切り刻むように銃身を動かしていた

カオル「ふぅ・・・こんなもんかな・・・・・・？」

そこでカオルは気付いた、サリエルの何体かが連合軍人の亡骸を、
遥か上空に運んで行くのを

カオル「なんだ？・・・っあ」

その様子を眼で追っていたカオルの眼に、連合軍所属のヘリが何台も飛んで離れていく様子が写った。そしてリンドウにも

リンドウ「あ、おい！、何であいつら引いていくんだ！？」

ツバキ「くっ！・・・見捨てるつもりか！！」

そう、大尉や連合軍人達は、神機使い達を囮に、融合炉から離れていっていた。だがリンドウたちが離れようにも・・・

ソーマ「・・・まだ来る・・・！」

防壁の外には、まだまだ無数のアラガミが蠢いていた

リンドウ「くそ！このままじゃ持たねぇ！！」

そして基地では、大尉が臨界点に達した融合炉の起爆スイッチに手をかけていた

大尉「はぁ・・・はぁ・・・・・化け物、共め！！！」

そして起爆スイッチを、押した。瞬間

巨大な光が融合炉から溢れ出し、リンドウ達を包んでゆく。そしてその光は、極東支部、その外部居住区、そしてロシアのとある病院にまで届くほどの物だった

大尉が勝ったと確信した笑みを浮かべる。しかし、その直後に目を見開く。コンソールに警告音と共に『Ｕｎｋｎｏｗｎ』という文字が浮かんだ次の瞬間

核爆発の光を巨大な黒い触手が包んで行き、そして、喰らい、消えた。残ったのは、爆発の衝撃波だった

そして、時間は流れ朝になった。融合炉があった地点は瓦礫の山となっていた・・・そして、その瓦礫の中から・・・殆ど無傷の神機使い達が出てきた。

その後はフェンリルによる後処理だけで特に話すこともない。基地に残っていた筈の軍人も全滅していた。そして帰る仕度が整うまで。ボーっと空を眺めてた時だ・・・俺がそいつを見たのは

太陽を背に飛び、その時は眩しくてよく見えなかったが巨大な竜のような、戦艦のような巨大な影その時は初の実践の疲れと相まって、唯の見間違いと思ってた・・・・・だが、６年後の今そいつがこうやって、この極東地区に姿を見せた。一体何が狙いなのか・・・

とりあえず、昔のこと思い出してたら少し懐かしくなったな・・・・・６年ぶりにツバキさんを落としてみるか、穴に

6年前（後書き）

御眼汚し失礼

何で出した？自分、何で東方出した？

まぁこんなアフォみたいな出来で楽しんで下されば幸いです

では、かなり遅れるでしょうが、次回をお待ちください

～予告っぽい何か～

謎の巨大アラガミ、フェンリルは戦艦型を『ヴァルハラ』、鎧型を『ケルビム』と名付け。本部からはこれを調査のため、アストレアの突入用巨大ブースターが送られてきた。ヴァルハラに取り付き、内部へ侵入するカオル。そしてその中で見たものは・・・？

※注：こいつ等に他に相応しい名称があれば、アドバイスください※

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3853o/

GOD EATER～鎧ヲ纏ウモノ～

2010年12月21日07時16分発行